279
32

始

遠藤隆吉著

帝國圖書館藏

第三版

帝國圖書館藏

1772
279-32.

序

余は淺學不德にして人の師となるには足らざれども書物を讀み、學問を勉むることに就いては數多の經驗を有す。往時を顧みれば讀書の方法の誤まれるがために無益に精力を費やし、多大の日月を浪費したること少からず。若し此の如きことなかりせば今頃は更に大なる發達をなしたるならんと思ふこと一再ならず。世の青年讀書子にして余と同樣の失敗を經驗し、學業の進まざるを嘆息しつゝあるものも少からざ

るべく、此れ等青年學生をして余と同樣の經驗を繰り返へさしむるの氣の毒なるを思ひ、同人の請ひに任かせて此書を書き列ねたり。余が衷情の暴露にして何等の修飾をも施さざれば或は讀者の身心に不適當なるものもあるべく、又或は大家先生の教訓と異なる所もあるべけれども、其れ等は要するに讀者の取捨に任かするより外なし。學生諸子が本書を讀むで、自から參考とする所を得、子を有つ親が其の子の勉强上に多少の參考となるものあるを發見せられなば、こゝ望外の幸ひなり。

大正四年五月下澣於巢園學舍

遠藤隆吉誌

讀書法目次

一　讀書法……一
イ　初の十頁……一
ロ　精讀……四
ハ　目錄學問……七
ニ　一冊の書……八
ホ　多讀……一四
ヘ　粗讀は腦髓を惡くする……一七
ト　夜より朝に掛けよ……一九
チ　時間利用法……二三
リ　讀書と鉛筆……二三
ヌ　讀書して考へよ……二三

ル　讀書と書く事……三五
ラ　讀書と靜かなる事……三九
ワ　音讀……四一
カ　讀書に神經質となるな……四三
ヨ　讀書の精力……四六
タ　系統作成法……四九
レ　書物參考上の注意……五二
ソ　西洋人の名前の行列……五四

二　漢學研究法……五八

イ　古典……五八
ロ　諳誦……六二
ハ　一人の文を讀むべし……六四
ニ　寫本……六七

三　英語研究法……六七

イ　小兒の如く習へ……六七
ロ　音讀……六九
ハ　一字々々の諳誦……七〇
ニ　暗記の性質……七四
ホ　英語に親しくなれ……七五
ヘ　五官を英語に順應せしめよ……七六
ト　文典の事……七八
チ　古典を讀む事……七九
リ　英語以外の外國語……八一
ヌ　一國の言語に精通せよ……八〇

四　各科學問總論……八三

イ　學問の一般を知る事……八三

ロ 學問研究法……八四
ハ 實業家も亦學者たれ……八八
ニ 學問の空氣……九四
ホ 諳記の學と理解の學……一〇〇
ヘ 練習の學問……一〇二
ト 諳記……一〇三
チ 外國語の必要……一〇四

五 精力利用法……一〇六

イ 力を勞する事少くして功を收むる事多し……一〇六
ロ 食物の事……一〇九
ハ 早起の事……一一一
ニ 精力轉換……一一三
ホ 身體の健全……一一六

ヘ 大に飢えて大に働け……一二九

六 學校に於ける讀書法……一三三

イ 學科に依りて違ふ……一三三
ロ ノートブック……一三三
ハ ノートブックの書物……一三六
ニ 外國語勉强法……一三九
ホ 著書なき先生……一四〇
ヘ 數學勉强法……一四一
ト ノートの整理……一四一
チ 試驗……一四三
リ 學校の價値……一四七
ヌ 現代潮流の理解……一四一
ル 學問の心を長ずる事……一四二

七 試驗準備法……一四五

イ 試驗は大難關……一四五
ロ 早くより着手せよ……一四六
ハ 徹底せよ……一四七
ニ 各學科を一緒にするな……一四八
ホ 試驗と睡眠時間……一五〇
ヘ 試驗と健康……一五一
ト 試驗と答案……一五二

八 小學敎師の勉强法……一五八

イ 小學敎師の位置……一五八
ロ 學校の學科を中心とせよ……一六〇
ハ 專門學の研究……一六四
ニ 小學敎師の權威……一六五

九 夏の讀書法……一六九

イ 長い時日……一六九
ロ 夏期の簡易生活……一七〇
ハ 夏期の衞生……一七一
ニ 一科を勉强せよ……一七六
ホ 良い書物を擇べ……一七八

十 隨處の讀書……一八〇

イ 電車内の讀書……一八〇
ロ 汽車内の讀書……一八一
ハ 讀書會……一八二
ニ 讀書第一……一八三
ホ 人民と土民……一八五

讀書法目次

讀書法

文學博士　遠藤隆吉著

一　讀書法

イ　初の十頁

吾輩書物を讀むことに就ては數多の經驗を有して居るから之に就ては多少人の手本なるやうなことが言へるやうに思ふ。凡ての書物は先づ大概初めの十頁位の所を精讀するを要する。固より十頁と限つた譯ではない。けれども兎に角初の方を精讀することを要するのである。著者の精神は大概初の方に表れて居る。其れの

みならず、初の方を讀み破ると云ふと著者の熟字や詞の遣ひ方や、話しの仕組などが分かつて來るからして段々によく分るやうになる。初の十頁を精讀するといふと次の十頁は早く分かることになるし、更に其次の十頁は尙早く分かるやうな勘定である。

それであるから初讀むときには手間が取れるやうであるが實は手間が取れないのである。

希臘語の書物などを讀む場合に當りては殊に此の流義が必要である。如何なる書物でも大概初の十頁を精讀すると其後の方は極めて讀易くなるものである。それは何故かと云ふに、初の方に方言とか又は特別なる熟字と云ふものが出て居るからである。初の十頁といふことは此點に於て大に必要なることであるが、是は喩へて見ると紙が粘

り付けてあるのを剝がすにしても眞中から剝がしては旨く剝がれない。端の方から剝がすと云ふと全体がスラリと剝がれるやうなものだ。乱れたる麻を解かうとするときに當つても、初の緒(イトクチ)を發見せんとするとはむづかしいが緒(イトクチ)さへ發見出來れば次第に之を解くことが出來るやうになる。されば讀書法の第一として初の十頁といふことに注意すべきである。初の十頁は殊に精讀を要するのである。一字一句でも分らぬ所があつてはならぬ。一字でも分らぬ所があれば、字引を引くなり他の書物を參考するなりして十分に其意味を了解せよ。さうすると深く強く腦髓に印象するから更に其の次を讀まうとする氣を起すやうになる。此點を怠つたならば迚も書物を熟讀するといふことは出來ない譯になる。

□ 精讀　精讀と云ふことは一番必要である。朱子が讀書の訓誡として言ふたことがある。曰はく。讀書の法は順序に循たがつて次第に進み、熟讀して精思するに在り。字ごとに其の訓を求め、句ごとに其旨を索め、未だ前に得ざれば則ち敢て其後を求めず。未だ此れに通せざれば則ち敢て彼れに志ざさす。先づ須らく熟讀して其言をして皆吾れの口より出るが若く、繼いで精思して其意をして皆吾れの心より出るが如くならしむべし。

と。又曰はく

讀書は別に法なし。只だ要するに煩はしき子細のことに耐ふるのみ。是れ第一義なり。

と。此の意味は讀書の法とても別に他あるにあらず。唯だ煩らしき細かきことを忍耐し行くのみといふので即ち精讀を奬勵したものである。今假りに一冊の書物が百頁あるとすれば其の百頁全体を讀んでも朦朧として居つた日には腦髓に收まらない。腦髓に收まらない知識は何の役にも立たない。

之に反して一部分丈讀んでも是れが極めて精密に且つ深く理解されて居れば其れが既に腦髓の要素になつて居るから、其終りの所は假令讀まないにしても惰力でもつて理解することが出來るやうな鹽梅がある。吾輩演說をするにしても、文章を書くにしても暗記といふことが必要である。暗記して居らない者は迚も役に立たぬ。英語を遣ふにしても、英語を暗記して居らなければ遣ふことは出來ない。西洋人と會話しながら一々字引を見るやうでは不自由である。演說しながら

書物を參考しなくてはならぬと云ふのであつたなら聽く人はありはしない。腦髓に收むると云ふことが必要である。此點に於て實に書物は精讀を要するのである。

初から精讀して一字苟もせずといふ樣に讀んで行きさいすれば大に興味を惹き起すものである。隨て全體を讀み破ることになる。初めが朦朧として居るといふと腦髓に觸れない。腦髓に觸れないからして馬耳東風の如くで殆んど何等の興味も起らない。讀む氣にはならない。途中で廢して了ふことになる。

斯う云ふ譯であるから、凡て書物は必ず精讀を要する。昔より學者は大概精讀を事としたものである。彼の太宰春臺の如きは多くの書物を讀んだものであるが、書物を讀む毎に一々赤き色だの青き色を以

て文字を染めながら讀んだといふことであるが、是は一字苟もしない樣にしたものである。人間は凡て自分のものになつたのを喜ぶのである。一ッの文字にしても、字引などを引いて其文字を前後左右から十分研究するといふと能く分かつて來る。能く分かれば面白くなつて來る。分からないから面白くないのである。何んでも精讀といふことに注意せんければならない。

八　目錄學問　今日の時代に當りては書物の數は澤山ある。澤山あるから內容を讀まないで唯ゞ其目錄だけを見て分つたやうに思ふて居るものが尠くない。引用するにしても目錄を見て直に引用する者がある。書物の議論をするにしても目錄だけで議論をする人がある。此の如き人には書物の眞意が理解出來る筈がない。近頃は目錄學と

云ふものが一般に流行であるが、馬鹿げたことである。目錄學をやると云ふと其人は如何にも學者の樣に見える。如何にも偉い樣に見える。太田錦城は斯の如く目錄を列べることを稱して書肆學と云ふた。つまり、木屋學問と云ふことであるが、形ばかり立派で實のないことをいふたのである。

今日は書物が澤山あり學問研究の便宜も十分に行屆いて居る筈であるのに、大學者が少ない――少ないと云ふては或は失禮かも知れぬが――割合に大學者の出でぬと云ふのは目錄學の流行が一ッの原因だらうと思はれる。

二　一冊の書　一冊の書を精讀すべし。一冊と限るわけではないけれども、兎に角精讀といふことを奬勵せんが爲めに吾人は特に茲に一冊

の書と云ふたのである。今茲に同じ論理學に就いて數十百冊の書物があるとする。論理學を研究せんとするものが此等數十百冊の書物を讀破しなければならないといふと、なか〳〵の大事業である。一冊の書を讀破るのでさへも尙且つ二箇月や三箇月を要する。其割合にして數百冊を讀破ると云へば或は十年十五年を要する。思ふた丈けでも大概の者は落膽して了ふことになる。

けれども書物を讀破ると云ふことは斯の如き譯のものでない。書物には難易の程度がある。小學校の一年生と中學校の一年生とは程度が違ふ。中學の一年生になれば小學校の程度の事は大概分かつて居る。大學の一年生になれば亦中學校の程度のことは大概分かるといふ樣な具合である。學問の精神を得て居りさへすれば低い程度のもの

は總べて分かるのである。是と同じ樣な具合に論理學の書物が數十百冊あつたにした所で其中の一冊を精讀して見よ。さすれば丸で世界に於て有數の論理學者の思想を理解したのである。有數の論理學者の思想を理解することが出來さすれば則ち自分も亦其れだけ遙か高尙なる思想を得たのである。高尙なる思想が自分のものになつたのである。斯うなると云ふと自分は既に論理學の方面に於いては少くとも其著者と同一の程度まで――其以下ならんも――に達することが出來た譯である。十分に理解して居りさへすれば、少くとも高尙な程度に行けるのであるからして。外の論理學の書物を讀んでも鑿々として理解することが出來るし、又中には讀んでも馬鹿氣て見える所が出て來る。隨て讀むといふことが極めて雜作ないことになつて了ふ。であるから初の一冊を讀むのに六箇月かゝつて精讀に精讀を重ねたものとする、十分に理解したものとすると云ふと、其他の書物は或は十日或は五日で以て讀破ることが出來る樣になる。偶々むづかしい書物があつたにしても是亦一箇月か二箇月で讀破ることが出來る樣になるのである。書物を讀むには斯樣にしなければならないのである。そこで讀書法と云ふことの必要が起こつて來るが、讀書法に於ける第一は一冊の書物を讀破ることである。

論理學なら論理學に付て最も良い書物一ッを擇んで之を精讀せよ。之を玩味せよ。一字も苟もしてはならぬ、一句も見遁してはならない。恰も赫々たる太陽の熱を以て氷を解かすが如くにせよ。煥然として氷釋する樣な具合にせよ。さうなると云ふと自分はそれだけ遙か高

尙なる程度に到ることが出來たのである。自分の思想と云ふものが高尙なる程度に進むと云ふことは容易なことではない。餘程の努力を要する。であるから一冊の書物を讀むだ前と後とに於て非常な差が出來る譯である。此故に長い年月を費やすといふことは據ない。粗雜に讀むと十日でも二十日でも讀み了ることが出來る。其代り六箇月かゝつて讀むといふと、六箇月以前までは大學一年生の程度であつた者が、六箇月以後になれば既に三年生程度になつて居る譯である。粗雜に讀むと云ふと元の通り一年生である。依然として一年生の程度に在るのである。斯の如き譯であるからして、動物學なら動物學の方で一番良い書物を擇んで精讀するが宜い。さうすると他の動物學の書物も讀易くなる。社會學にしても宗教學にしても何にしても、其の

種類の中で一番良い書物を一冊擇んで讀まなければならない。茲に於て一冊の書と云ふことが大に意味がある。一冊の書は同時に一冊の書に止まらない。世界に於ける同じ學問をして居る學者と同じやうな思想に到達せしむるものである。

同じく論理學を研究して居る學者であつたならば同じやうな思想を有つて居るのである。多少意見の違がありにした所で共通点が多いのである。而も大体同じ程度の者である。であるから一人に就て其の人の思想を十分に呑込めば先づ卒業證は之を得たのである。違つた人の書物を讀むと唯々違つた意見を聞くに過ぎないといふことになつて來る。此れによりて一冊の書物を熟讀すると云ふことが人間思想の程度を上げるものであるといふ意味が分かるであろう。且

つ又一冊の書物の意味が一冊の書物に止まらない。凡ての學者に共通ある所の思想を得せしむるものであると云ふことの意味が分るであろう。

ホ　多讀　精讀と同時に多讀と云ふことが非常に必要である。論理學の書物にしても多く讀んで多數の學者の意見を知らなければならない。而して後初めて自分の論理學上の思想が出來て來る。何に依らず多讀を要する。殊に漢學の如きものになるといふと最も多讀を必要とするのである。普通一般の學者となるには必ずしも多讀を要せない。唯々一冊の書物を精讀すればそれで濟むのである。又一冊の書物を精讀することが多くの書物を雜に讀んだよりか優れて居る。學者と云ふても書物の目錄ばかり知つて居つて其の內容を知らない者がある。一冊を精讀した素人にも劣ることがある。けれども一科の學問を研究しやうと思ふ者は必ず多讀を要するのである。一冊の論理學の書物を中心として更に大に他の論理學上の書物を讀むべきである。其れに依つて以て自己の學問を作ることも出來るのである。

今日は活版印刷の技術が大に發達して書物が普及されて居るからして多讀しやうと思ふたならば書物は之を容易に得ることが出來る。德川時代などは是と異つて漢學先生が書物を讀まうとしても容易に之を得ることが出來なかつた。是が爲めに學者が世襲と云ふ狀態であつた。即ち親が學者であると子供も學者になる、親が學者でなければ子供も亦學者なることが出來ぬと云ふ樣な狀態であつた。林大學頭の子孫は代々學者であつたと云ふ樣な具合である。是は何故であ

るかと云ふと、書物があるからして自然それを讀むことになつて隨て學者となるのである。之に反して地方にでも居ると云ふと書物がないから學者になることが出來ないのである。地方に居る所のものは淺見寡聞を免れないのである。

昔し物徂徠と云ふ學者があつたが、父に隨て南總に謫せられて居つた。此の間大學諺解一冊を讀んだばかりであつたと云ふことである。けれども徂徠は熟讀に熟讀を重ねて十分に之を咀嚼玩味したものであるからして漢文の味を理解し儒教の根本精神を納得した。其後江戸に來るに及んで隨分困難した。或時は芝の增上寺の前で豆腐屋から雪花菜を貰つて僅に飢を凌いで居つたと云ふことである。其後追々成功したが、或時一書肆が店を仕舞ふので廉く書物を賣拂ふといふ話の傳はつたときに徂徠は自分の持つて居る物を悉く質に置いて之を買入れたと云ふことである。徂徠が多くの書物を讀破つたと云ふのは全く大學諺解一冊を精讀した力に依ると云つても宜いのである。之に依て見れば則ち精讀と多讀と云ふことは原因となり結果となつて居るのである。徂徠の例など殊に面白い。

多く書物を讀んでも粗讀では役に立たない。十分に力を籠めて精讀を要するのである。けれども既に自分の力が付いて居りさへすれば時を費やすこと少くして割合に精讀することが出來るのである。

粗讀は腦髓を惡くする　我輩精讀と云ふことを人に勸めるけれども、是れが最も必要なことである。「粗讀であると人間は頭を惡くして了ふ」。何故なれば腦髓の内に一知半解の事ばかり這入つて來。漠

然としたる事ばかり這入つて居るからである。其れ故に腦髓は乱れる許りである。何事を見ても判然とすることは出來ない。不用な部分不精密なる部分が多くなるからして、粗讀すれば粗讀するだけ腦髓が惡くなる。

餘り新聞雜誌又は其他の書物を濫讀する人を見よ。其人の眼の玉は乱れて居る。

「一冊の書物を粗讀するよりも一部分を精讀する方が非常に効力がある。是れは知識の内容を正確に得たと云ふことばかりではないので、腦を良くすると云ふことに於ても効力があるのである。」つまり、早く曰へば目が肥えたやうなものである。つまらぬものばかり見て居ると云ふと目は高尚にならない。好いものを見ると云ふと目が高尚

Note:—
粗讀は頭腦馬鹿にするべし。注意せよ！注意せ

になつて來る。今精讀すると云ふと、それだけ目が肥えたことになつて來る。又腦がそれだけ發達したのである。全躰を粗讀すると云ふと、腦はつまらぬ者許りを見たことになるから、極く淺薄な腦髓になつて了ふ。此点から云ふても粗讀と云ふことは大に戒むべきことである。今日の學者先生に就て考へて見よ。大家と稱せらるゝ人は何れも精讀を事として居る。目錄などを見て滿足して居るやうな者に學者はない。それでも世の中から學者々々と稱せられて居るのは、全く其實を失つた者である。

「ト　夜より朝に掛けよ　一冊の書物を讀まんとしたならば時間を擇ぶ必要はない。暇さへあれば之を讀むべきである。」此思想が讀書子に取りては先づ第一に必要なることである。食事の間と雖も其の書

物のことを考へて居るが宜い。路上に於ても其の書物のことを考へて居るが宜い。厠に行いても其の書物のことを考へて居るべきである。古人は文を作る三秘訣として厠上馬上枕上と云ふことを言ふたことがある。即ち此等の機會が一番宜いと云ふのである。讀書に當りては即ち何れの瞬間と雖も心此にあらざるなしと云ふ樣にせんければならない。若し然らずして書物を讀む時のみ精神が其處に行く樣であつたならば迚も精神に於て圓熟すると云ふことは出來ないのである。「思想は幾たびか繰返されることに依て明白にもなり深く印象されることになるのである。其事を能く考へるが宜い。書物を讀んだだけでは面白味は出て來ない。自分で考へて見る必要がある。即ち一の書物を讀初たならば思想の連續と云ふことを要するのである。

殊に夜より朝にかけて連續することが必要である。机に向つて書物を讀んで將に寐んとするときに枕上に其の書物を齎して眠り全く横になつても其の書物に眼を曝して居るが宜い。電燈を消して書物を伏せたならば其の書物に就て考へるが宜い。其間に睡氣が催して眠つて了ふ。翌朝目が覺めたら直ちに其の書物を讀むべきである。

昔の先生は齋戒沐浴しなければ書物に對はない。書物は聖賢の言であるからして顏も洗はない內に之に對ふと云ふことは出來ない杯と言ふたけれども、是は愚な話である。忙しい今日に於て殊に自分の爲めに書物を讀まんとする者は斯の如き遠慮は要らない。朝、目が覺めたからば直に其書物を讀むべきである。元來朝起きると云ふと精神朦朧として居る杯と云ふは精力の足らない證據である。青年に於

て斯の如きことのあるべき筈がない。朝早く枕上目を開けば則ち精神は判然たるべき性質のものである。朝起きて頭を洗はなければ腦髄が判然せぬとか、顔を洗はなければボンヤリして居るなどと云ふのは極めて意氣地のない話で、萬が一にも斯の如きことを言ふべきものではない。又あり得べき性質の者でもないのである。讀書を重んずる者は夜から朝にかけて連續する樣にせよ。殊に朝起きて直に讀んで、其れから又飯時前まで讀むと云ふと非常に効力がある。「朝飯時の後にはいろ〳〵仕事があると思ふから急いで讀む。且つ精神が疲れて居ないから、恰も時間を惜むが如くに、而も十分なる精力を費やして書物に對ふことが出來るから非常に早く進行するのである。是が詰まり時間利用法である。夜から朝に連續すると云ふことが書物を讀むに就ては一番必要である。試みに經驗して見よ。必ず予が言の人を欺かざることを悟るであらう。

チ　時間利用法　時間を利用すると云ふことは今日の人の最も力むべき所である。殊に讀書にとりては最も必要なることである。好きな書物は案外進み易い。何故ならば食後に讀み休憩時間に讀み、夜讀み、書物に引付けられるが如くに讀むのであるからして、眼が行くよりも精神の行く方が早いと云ふやうな具合である。莊子の書物の中に庖丁が牛を殺す場合に當つて磐根錯節に會すると云ふと官は止まるを知りて而して神往かんとすと云ふ事がある。即ち此流義で、眼は實際にさう澤山書物を見ることが出來なくても精神の上に於ては非常な興味があつて引付けられるからして何處までも讀みたいと云ふこと

になる。斯うなると恰も赫々たる太陽の熱を以て氷を解かすが如くに進歩は著しいのである。是などは詰まり時間利用の一ッであろう。

又朝起きて直に顔を洗ふとか或は揚技を使ふのが長いとか云ふ樣なことであつては讀書子としては成功することは出來ない。前項に述べたやうに直に書物に對ふべきである。飯が出來たと云ふ報知を聞いて即坐に顔を洗ひ口を嗽いで飯を食ふやうにしなければならない。殊に種々なる裝飾を施こして暇を費やすやうなことがあつては

なか〳〵學問を修めると云ふことは困難である。是亦精力を善用せんとする者の平生心懸くべき所である。

農家の子弟等日中は田畑に出て仕事をせんければならない者は殊に斯の如き點に注意して時間を利用することに力めるが宜い。

又凡ての物事は餘り憶刼にしない方が宜い。簡單に濟ませるが宜いのである。郵便局に行いて見ると、忙しいものであるからして其處に貼札がしてある。外套や手袋は脱がないで呉れろ、煙草も我慢して呉れろと。其杯は餘程面白い。禮儀から言へば外套や手袋は取るのが當り前であるけれども、さういふことをやつて居つた日には暇がかゝる。外套を脱ぐだけでも暇がかゝる。手袋をとるにも暇がかゝる。手袋を取り外套を脱ぐ暇には少しの話なら出來て了ふのである。又椅子に腰をかけることもしないで呉れろと書いてある。椅子に腰をかけて其れから話をしやうと思ふと矢張時間を取る。腰をかけ樣とする間に多小の用談は濟んで了ふ。禮儀と云ふ者は或る場合に於ては十分に盡さなければならないけれども、是は別に其場合があること

であるから、大概の場合は先づ簡單に濟ませるが宜い。往來で立話しで濟むことは其れで濟ますがよい。手紙などを書くにして一々筆を以て書けばなか〳〵億劫である。斯の如き場合には或は鉛筆なり萬年筆ありで濟ましてもよい。昔佐久間象山先生と云ふ人があつて非常なる見識を有つて居つた。自分の手紙は後世に遺るからして雜には書けないと云ふて常に奉書の紙に而も叮寧に書いたと云ふことである。此等は特別なことで、明治の今日に於ては迚も行はれ難いことである。象山先生の手紙は今日まで遺つて居るものが澤山あるけれども、皆實に綺麗なものである。今日の人が斯の如く綺麗に書かうと思つた日には事務は捗らない。用を辨ずることが出來ない。されば成るべく簡便にするといふことを力むべきである。

物は使ひ樣に依つて或ひは大なる効力を生ずることもあるし、又殆んど効力を生ぜないこともある。昔支那に不龜手（ひびあかぎれ）の藥を造る者があつた。之を一家の秘法として、人に傳へない。さうして麻を洗ふことを以て業として居つた。乃ち寒中水の中に手を入れてもあかぎれが切れないものであるから冬でも商賣が出來て一家之に賴つて口を糊することを得た。所が或人があつて、此秘法を百金にて買はんことを請ふた。一家相談して曰ふのに、此の方法を知つて居つた所で纔に一家を糊するに足るのみである。今一概に百金を得るとすれば機逸す可からずであるといふて、其方法を賣つた。買ふた人は何うしたかといふと、之を越王に獻上した。越王は此藥を兵隊に授けて、冬に乘じて、河を渡ることが出來たのである。是に由つて其の人を封じて諸侯と爲した

とのことである。是れなどは莊子の所謂使ひ樣で、同じ不龜手の藥を小さく用いたのと大く用ひたのとの違ひである。一枚の紙にしても之を小さく用ひれば纔に鼻をかむに過ぎない。それのみならず、水でも拭けば殆ど布片の何十分の一にも當らないことになつてしまふ。けれども此れに非常なる名文でも書けば永く後世に傳つて大切にされ之を一見せんとを希望する者も多い。或は天皇の乙夜の覽に入るやうのことも出來る。其上下の差は實に大なるものがある。一塵の微なるものも若し敵軍の將の眼に當れば之をして明を失はしめ一軍をして悉く敗北せしむることが出來る譯である。物は使い樣に依つて或は大ともなり小ともなるのである。是れと同じ樣な譯で、一時間の時間と雖も決して小なりとなすことは出來ない。大事を成すことが出來る。

上杉・武田戰

日露戰爭と雖も僅に一時間の間に勝敗を決したこともあつたではないか。試驗の如きも其通りであつて、各學校の生徒が苦心慘憺の結果一年に學び得たる所の知識も僅に一時間の間に吟味されてしまふではないか。一時間といふ時間は實に大事を成すことが出來るものである。けれども友人相集つて菓子でも食つて居れば、一時間は扨措いて二時間でも三時間でも容易に過去つてしまふ。殆ど夢の如きものである。であるからして、一時間を以て短いと思ふのは間違である。之を使用するの如何に在るのみである。一時間の時間と雖も試みに之を一個の文字を調べるとに使用して見よ。一個の文字を調べるには、餘り精力を勞せず而も其文字の意味は十分之を理解することが出來

る。さうすれば終身忘れない所の知識を得るであろう。是れ即ち時間を善用したるものと謂ふ可きである。であるから、時間を善用するといふことは始終心懸けなければならない。光陰重ねて來らず、一日再晨し難しと朱子も謠つた如く、實際一寸の光陰も輕んじてはならない。十臺二十臺の時には先が長い樣に思ふて居るけれども、三十を越え四十を越えるといふと追々先が近寄る樣な感が起こつて來る。光陰は忽せにすべからざるものだといふことは此時になつて悟る。けれども、少年青年の時に浪費したる所の時間が多かつたならば老人になりて後に到達する所の程度も亦知れたものになつて了ふ。であるから夙くより一寸の光陰輕んず可からずといふ句を大切に思うて之を利用することに努むべきである。

讀書と鉛筆　讀書する者は常に鉛筆を持つて居らなければならない。或は萬年筆でもよい。讀みながら心に會した所があつたならば其趣を書物の端に書込むのである。或は二重圏點を打つ所もあるであらう。或は線を引く所もあるであらう。種々樣々に鉛筆で以て書込むがよい。書物は汚れる。汚れても惜むに足らない。自分の腦髄に知識を收めた方がよいのである。斯の如くして全篇を讀み了はつた後に更に自分が註釋を書入た部分をもう一回讀んで見よ。さうすると深く心に印象して忘れない樣になるものである。如何に書物を精讀したところで忘れると云ふことは免れない。忘れた所を思ひ出さうと云ふのには即ち何か自分で覺をして置かなければならないから、斯の如く書入をすることが極めて大切である。

圖書館の書物などには隨分ひどく書入たものがある。中には乱暴なことを書入れたりしたのもある。是れは法外なことで今談ずる限りではないが、なかなか好い註釋をしたものや、批評をしたものもある。批評を又批評したものもある。讀むだ人が違ふからである、例へば一の社會政策の書物があるといふと、其一部分へ或人が「人間當に斯の如くなるべき也」と書いて置く。さうすると其後に讀んだ人が「乞ふ、槐より始めよ」と書いた。吾輩圖書館に於て澤山の書を見たけれども、其間に斯う云ふやうな批評などがあつて、なか〳〵面白かつた。圖書館の書物は他人の物であるから書入れることは宜しくないが、自分の書物であつたならば十分書き入れをして更に其書入れた部分を再讀して全篇を思ひ出す樣にするがよい。

又　讀書して考へよ　讀書しても單に書物を讀むと云ふだけではいけない。書物の意味が理解されたと云ふだけでもまだ不十分である。之を己れの心に呑込まなければならない。呑込んだ丈ではまだ不十分である。「其是非善惡を批評するだけの力が出來なければならない。批評するだけでは尙ほ不十分であつて是れから新しい思想を自分で作らなければならないのである。自分で作つたものは卽ち自分の中から湧出でたものであるから本當に自分の物である。

昔から哲學者の三能と稱して讀む事、書く事、考へる事といふのがある。この考へると云ふことが一番必要である。考へなければ書物に讀まれて了ふ。書物に讀まれて了へば自分と云ふものはなくなつて了ふ。であるからして、一冊の書物を讀んだならば必ずソフハーの上に

でも横はつて深く考へよ。書物に讀まれない樣に何處に缺點がある か、考へて見よ。其れに就て自分の意見を出す樣に勉めよ。常に是れ丈の工夫を凝らさなければならない。考へる事が最も必要である。是れは哲學史家と哲學者との違ひである。哲學史家は多くの書物を讀んで人の說を知つて居るけれども、自分の考と云ふものは有たない。書物を讀んだ丈で、考へることをしない。哲學者は之に反して深く考へて居るからして自分の考へと云ふものがある。人間の性質として此等兩種の傾向があるけれども哲學史家では面白くない。哲學史家も一の學者であるから宜いとすればそれ迄であるけれ共、自分の考と云ふものゝあるのが最も必要なことであらうと思はれる。「自分で考へる習慣を付けるといふと何事に對しても意見が出る樣になる。意

9.25

「考へること」人生あり

見の出ると云ふことが青年讀書子に於て最も必要である。何故ならば、人の說を聞いても善いか惡いかを判斷することが出來なかつた日には何の役にも立たぬ。乃ち考へる力を養成するにしても是れも亦習慣であるから、平生から能く考へる習慣を付けさへすれば必ず出來るに違いないのである。讀書子は寸時も此の習慣の養成を忘れてはならぬ。一日に何時間か椅子の上に横になれ、或は寢床の上に横になれ。横になつたら考へると云ふことを勉めよ。道を歩く場合にも考へると云ふことを忘れるな。人に談話する時にも考へると云ふことを忘れるな。此の習慣を養成することを勉む可きである。

ル◎讀書と書く事　書くと云ふことは是れ亦極めて必要である。自分の腦髓に考へて居ることを文字に表はすことである。腦髓の內で

考へて居れば明瞭の樣であつても、文字に表はすといふと案外不明瞭なことがある。是れは表し方が拙と云ふ譯ではないので、はつきり分かつて居ると思ふ事が其實はつきり分かつて居らなかつたのである。丁度畫を描かんとする樣なものである。試みに自分の腦髓の內で、一人の人間の畫を描かうと想像して見よ。一寸考へると極めて判然として居る樣だけれども、愈々筆を執つて之を描かんとすると、やはり漠然たる處がある。是れは何故かと云ふと、心の內では判然として居る樣であるけれども其實は判然として居らなかつたからである。所が畫工になるといふと、既に腦髓の內に於て極めて判然として居るからして筆を執つた場合にも明瞭に描き出すことが出來るのである。

此の如き譯であるから筆を執るといふことは出來る限り勉む可きである。演說するにしても然うである。初の程は極めて不十分であるけれども、能く勉强するといふと次第々々に上手になる。次第々々にはつきりして來る。演說の下手と云ふのは何であるかと云ふと腦髓が不明瞭であるからである。何處から言つてよいか分からない、如何なることを言つてよいか分からないのである。腦髓がはつきりして居つたならば必ず明晰に之を言ひ表すことが出來る譯である。其れが爲めには平生からして喋舌る癖と書く癖とを付けなければならない。十分に能く書くといふと矢張考へて居ることが其れ自身明瞭になつて來る。十分に書きつらねて居れば腦髓の內に一點の疑もない樣になる。斯うなるといふと演說するにしても巧くなるし、文章を作るにしても早くなる。新聞記者や雜誌記者を見よ。此等の人は書く

他日の準備だ。

事に慣れて居るからスラ〳〵と書いて少しも直す所がない。腦髓の内に明瞭に浮び出るからである。書きつけない者は幾たびか訂正する。何となれば腦髓に於て極めて不明瞭であるからである。書き慣れると云ふことが最も必要である。

然るに、世の青年乃至學者には、詰まらぬものを書くのはいかぬと云ふて書かぬ人がある。成程詰まらぬ者を書くのは悪いかも知れぬけれども、其れ程までに氣取る必要はない。自分が善いと思つて居る事なれば世の中に發表してもよいのである。其れが悪いならば訂正する丈のことだ。自分を故らに善いと見せる必要はない。他日自分が發達すれば亦發達した程度の事を書けばよい。自分の發達が悪いのに發達したる人間であるが如くに人に見せやうとするのは矢張り一種のヴアニチーである。虚榮心である。「終身の間に一大著述をすればよい。詰まらぬものは書かぬと言ふのは是亦一種の虚榮心である」淡泊でない。

自分は世の中の青年讀書子の向上發展せんことを希望する。「今日低き程度であると云ふとは構はぬ。「他日發展せんことを希望する。」雜誌でも新聞でも、苟も書く機會があつたなら十分に書け、演說する機會があつたなら十分に演說せよ。」古來哲學者の三能と稱して、讀む事、書く事、考へることゝ言つたが、書く事を斯の如く重んずるに拘はらず學者先生達が書かないのは何う云ふ譯であらうか。青年讀書子は大に注意しなければならない。

ヲ　讀書と靜かなる事　讀書は靜かなる境遇を必要とする。騷々し

き處に於ては書物を讀んでもなかなか理解することが出來ない。簡單なることは理解することが出來るが、高尚なることと複雜なることになると云ふと到底駄目である。如何となれば外界の刺戟が強いからして不知不識其方面に氣を奪はるゝからである。坐禪用心記と云ふ書物があるが、之には坐禪に關する心得が書いてある。部屋の明暗を良くすべしとか、食物は堅いものを喰ふ可からずとか、敷物は餘り厚くてもいかず薄くてもいかぬとか、室内の温度は寒くてもいかぬ暑くてもいかぬとか、此等の種類のことが書いてある。精神主義の人から見ると いふと、斯くの如き注意は禪でもやらうといふ人に取りては誠につまらぬことのやうであるけれども、其實必ず外部の刺戟を去ることを努めなかつたならば到底出來得ないのである。

殊に書物を讀まんとする時には、腦の最も高尚なる部分が作用して居るのであるからして人間は極めて神經質なる狀態になつて居る。早くいへば、腦髓の極く神經過敏なる部分が刺戟されて居るのである。此故に外界の影響にて此弱い部分が刺戟されるのである。ために非常に腦を痛める。腦の弱い人が騷々しい處で書物を讀むと頭が痛くなるのは此道理である。其上に外部の刺戟を押へて内部の方より多くの力を注がんとする所の注意力が亦非常に大なるものであるから如何しても神經を勞し乃至は身體を疲らすことになる。それで出來るならば讀書は成るだけ靜かなる場所殊に靜かなる部屋に於てすべきである。

ワ　音讀　自分の聲に囚はれることが隨分あるものであるから、騷々

しき處で書物を讀むは音讀するに限る。即ち音讀するといふと、自分の耳で自分の聲に注意するからして、外界の刺戟を被むることが比較的少い。殊に神經の疲れた時などは音讀すると精神を爽かにすることにもなるし、又一面心の內部で考へて居ることを明瞭に口に現すことになるから、比較的好く之を心に收めることが出來る。此點から見ると音讀は必要である。

門前の小僧習はぬ經を讀むといふことがあるが、つまり人の音讀するのを聞いて口眞似をして居ると自然慣れて了ふのである。吾輩も小供の時にいろ〳〵經驗して見たが、試驗前に夜十時十二時過になつて疲勞して來た時に音讀を始めると、口拍子の上でも好く覺える。口拍子で覺えてゐるといふことが、是れ亦記憶に取つて殊に必要である。默讀は書物の中の意味を理解するには好いけれ共、文字を覺えるとか又は發音を覺えるといふ爲めにはならない。音讀すると言葉の口調で覺えて居るから、より好く吾人の精神に印象されることになるのである。殊に漢文や英語の如きものは、口調が大切であるからして音讀に限る。漢文や英語の如きものは音讀がよいけれども、總てのものが音讀ではいけない。考へることの必要なるものに至つては必ず心の中で靜かに考えなければ分りやう筈がない。音讀は比較的簡單なる者に於て効果があるのである。是れは各人實驗して見れば直ぐ分かることである。

カ　讀書に神經質となるな　讀書する場合に當つて餘り神經質になるといふことは面白くない。例へば身體を淨めなければ本が讀めな

いとか、十分眠らなければ讀めないとか、腹が減つては讀めないとか、人が居つては讀めないとか、何々があつては讀めないとかいふやうに、餘り六ケしい注文を持出して、極く自分の氣に適つた境遇に於てのみ書物を讀まんとする樣では矢張讀書の時間が少くなり、其上に本當に其書物を理解するとも出來ないやうになつて來る。如何なる瞬間と雖も書物を讀むことに注意すべきである。今日の人が、時々、能く遊んで能く學べといふが、遊ぶとはつまり逸樂を求めるので、人間の癖として當然免るべからざる所である。疲れゝば誰でも休まうとする。けれども勉強といふ方は厭であるから之に向ふ者は少い。何故に遊ぶとを奬勵するのであるか、教育家がつまり社會に媚びた意見を出すのである。又或は曰ふ。今日の時勢に當つては新聞や雜誌も少之を讀ませなくてはならぬと。斯くの如きは矢張り世間に媚びた話である。其上新聞や雜誌に媚びた話である。中學校の生徒などは新聞や雜誌に對しては何等の興味を持つ必要もないのである。政治家と雖も新聞を讀んで政治家になることは出來ない。哲學者と雖も新聞を讀んで哲學者となることは出來ない。文章を作るにしても新聞や雜誌に依つて文章家となることは出來ない。新聞や雜誌は一時の娯樂に過ぎないのであるからして此等のものを子供に讀ませる必要は毫頭ない。或は曰ふ。それでも子供は讀みたがるから、一冊を限つて讀ませる方がよい。即ち小供の精力を一方面に洩らしてやるのであると。けれども、初めから全然讀まなければ讀みたくないのである。其精力を十分に學問の方に注がせる方が宜いであらうと思ふ。是れと同やうな

譯で能く遊ぶといふことは奬勵しないでも出來ることであるからして唯如何なる瞬間に於ても勉强せよといふことを奬勵する方が敎訓としては好いことである。

三　讀書の精力　讀書位人間の精力を費やすものは恐らくないであろう。實際の事務を管掌して行くのも骨が折れるに違ひない。又精神を要するに違ひないけれども、是れ等は人を相手にすることであるからして知らず識らず出來て了ふ。隨て晩歸ると案外疲れたといふことがある。けれども讀書は是と違つて書物に向ひすることであるから、自分が努めなければ出來ない。興味に釣り込まれて次第々々に讀むといふ場合のみはない。努めて讀まなければならない。假令興味に釣り込まれて讀むにした所で、一行々々一字々々に付いて行くのであるから第一眼を勞すること非常なものがある。注意を要すること非常なるものがある。注意をするに隨て頭の筋肉や身体の筋肉を勞すること亦非常なる者がある。此故に食後數十分を經て書物を見ると空腹を感ずるものである。是が明かな証據である。數百頁もある所の書物を初よりソロ〳〵と讀破つて行くといふことが如何に精力を要するものであるかといふことは考へて見ても分るのである。朝から晩まで坐つて居らなければならない。坐つて居るといふことは決して樂なことではない。其れよりかも大雜葉に外へ出て活動したり談論したりする方が、懷手しても居られるし氣儘なことも言へるから樂に違ひない。書物の爲めに縛られて居るといふことは如何にも困難なことである。此位勢力を勞することはないのであるから、學者

となつて數多の書物を精しく讀んだといふ人は眞に偉人だと言はなければならぬ、眞に精力家と謂はなければならない。精力のない所の學者もあるけれども、其等は稍く一片の書物を讀了つたといふだけである。本當に大なる書物を讀破るといふことは出來ないのである。それにしても眞の學者といふものは必ず大に精力がなかつたら迚も出來ないといふことは明なることである。

自分は曾て思ふたことがある。世の中に政治家といふものがある、實業家といふものもある。けれども何れも學問を以て中心としない者はないのである。學問を以て中心とするのであるけれども學問の精力を要すること非常なるものがあるからして途中で外れて了つて或は實業家となり或は政治家となるのである。其れを最後迄仕上げたる者が學者となるのである。

西郷隆盛、伊藤博文、大久保利通、木戸孝允などの人々は何れも學者であるけれ共儒者といふ程の學問はないのである。此等の人々にしても、學問は好きには違ひないけれども國事に奔走して其方へ外れて了つたものとも言へる。殊に實業家などに至つては早くから他に外れて了つたものと見ることも出來る。自分は書物を讀む位精力を要するものはなく隨つて十分に書物を精讀したる人は偉人であるといふことを信じて居るのである。

系統作成法

系統を作成しやうと思ふ者は須く左の方法に據るべきである。

先づ假りに動物學の系統を作ることとしやう。自己が動物學に對

して幾冊かの書物を讀まなければならない。此書物を讀んで後に沈思熟考して或る系統を作つて之を筆にして見るがよい。自分のノートブックが出來た。

此ノートブックたるや極めて詰まらぬものであるといふことを自覺して居らなければならない。此ノートブックは是から自分の伴侶と爲つて常に相互に研鑽して行かなければならないのである。自分が他の動物學の書物を讀むときに當つても何處か自分の系統に惡い所がありはしないかと思ふて始終系統に付て考へて見よ。又他の書物を見ても始終努力せよ。何處か自分の系統に惡い所がないかと思ふて系統に付て考へよ。系統に付て苦心せよ。更に又外に出て實際の動物を見たときに當つては其が自己の系統と如何なる關係があるか、此動物に關する觀察が間違つて居りはしないかといふやうな具合にして、不斷自己の系統に注意しなければならない。

此の如く注意して自己の系統に於て誤謬を發見し又新らしい意見を發見したるときは必ず欄外に書き入れして置くのである。斯の如くすること數年の久しきに及ぶときには、初に作つた所のノートブックは眞に詰まらぬものと爲つて了ふ。全部を變へなければならない樣になる。此時に到つて又善く沈思熟考せよ。さうして新に系統を作り直すが宜い。新に系統を作り直ほすには非常に骨が折れるに違ひない。けれども骨が折れるまゝに十分に精力を費やして以て之を作れ。然るときは茲に新なる一の系統が出來たのである。其の系統は前のものより多少良いに違ひない。けれども之に滿足してはなら

ない。復た動物學の書物を讀め、或は動物を觀察せよ。機會ある毎に自分の系統を批評して改良することに力めよ。斯の如くすること數年の久しきに及ばゞ又自己の系統を作り直す必要が生ずるであらう。斯の如くに終身繼續すれば自己が其動物學の系統と一緒に成長することが出來る樣になるのである。是が卽ち系統作成法である。であるからして自己が死んでも其系統は遺る。詰まらないものであれば自己が詰まらないのである。偉い者であれば自己が偉いのである。自己の生命が其處に現はれて居るものと謂ふことが出來るのである。

レ　書物參考上の注意　書物を參考せんとするに就いて二ッの意味がある。一ッは彼書物には斯うあるけれども此の書物には如何樣に解釋してあるだろうかと云ふ樣な場合である。一ッは、此書物には此文字が用ひてあるが他の書物には如何なる文字が使つてあるかと云ふ樣な場合である。前者は意味を研究するのであるし。後者は文字を研究するのであつて、前者は深くして後者は淺い。後者の場合に於ては極めて簡單な事であるから其文字のあろ所を見さへすれば雜作なく分かることである。歷史上の年號を調べるとか名前を調べるとが云ふのは皆此方法にして出來ることである。

併乍ら意味を調べる事になるとなか〳〵然うは行かない。唯一箇所讀んだ丈では分からないことが多い。前後の關係を見なければ其句の意味を解することの出來ない場合が多い。其一句の意味の解釋の困難であるのは其場丈見れば斯うであるけれども外の處から推すと亦違ふことがあるからである。であるからして意味を取るといふことに

なると餘程事が面倒になるからして平素より能く書物を讀んで置かなければならない。其れを一夜作り的に、今或る一種の學問上の仕事をやりかけたとか書物を書きかけたからとて俄かに參考しやうと言つても出來ない。さういふことは平生能く讀んだ書物に就て參考するやうに力めなければならない。其れにしても多くの書物を精讀すると云ふ必要のあるのは最も明かなことである。

ソ

西洋人の名前の行列　日本人は西洋人の名前の行列を作ることを好んで居る。西洋人の名前を聞けば何でも喜んで之を書いて以て自分のオーソリチーにせんとする傾がある。是は極めて馬鹿氣た事である。西洋人でもまだ案外二十歳年代の人もあるし、又は名の聞えない人もある。それにしても其說が優秀でありさへすれば好いには

違ひないけれども、經驗もなく學問もない者から引用するとのあるのは可笑しい。何によらず、唯だ西洋人は偉いものとして其言を引用するやうなことがあつては學者として愧づべきのみらず西洋の事情に通じないと云ふ點に於ても亦大に愧づべきことである。見え透いた誤りをいふ樣なものだ。

日本人位西洋人を崇拜する者はないであらう。　西洋人に笑はれるからと云ふのが普通の言葉である。それでありながら西洋人を笑ふと云ふことを敢てしないのは何う云ふ譯であらうか。亞米利加の子供が學校の敎場に於てすら尙且つ物を食つて居ると云ふことは行儀なきの甚しきものである。獨逸の學生が地に達するやうな長い煙管を喫かして居るなどと云ふのは決して褒むべきことでない。のみなら

す。西洋の子供が飯を食ふときには歩きながら食つて居る。不行儀の甚しいものと謂ふべきである。西洋人を笑ふと云ふことをしないのは何う云ふ譯であらうか。ハイカラーの婦人貴婦人連が寄つて集かるといふと。日本婦人を見て、あんなことをして居るから西洋人に笑はれると言ふ。汽車中でも往來でも何でも西洋人に笑はれると言ふことを心配して居つて、其實自分が西洋人を笑つてやるといふことをしない。西洋人の行儀のないことや、西洋人の貞節を重んじないといふことは驚くべきものがある。何故に日本人は之を擯斥することを敢てしないのであるか。吾輩實に怪訝の至りに堪へないのである。斯の如く西洋崇拜の熱度が盛んであるからして、西洋人の名前を引くといふことは以て著書を飾るに足ると思ふて居る。名も知れず學識もな

い樣な人間の言であつても西洋人の名前さへ引用すれば其の場が淫まるやうに思ふて居る。或る演說家の內幕話を聞いたのであるが、滔々たる懸河の辯を振つて二三時間演說して辯じ去り辯じ來つて終りに、尙ほ聽衆が自己の說に對して疑を有つて居るやうな時には突然出鱈目の名前でも構はぬからして西洋人の名前を引用し來つて、何々曰くと言ふと初めて聽衆が成程と思ふて感心するといふことである。

是などは事實に相違ない。隨分馬鹿氣たことであるが、書物を讀まんとする者は斯の如く不見識なことであつてはいけない。白きを白しとし黑きを黑しとする、必しも西洋人を標準としないでも宜い。是は吾輩數年來主張し來つた所である。西洋人ばかり偉いものゝ樣に思ふて居るは其衷情誠に憫むべきものがある。

二　漢學研究法

イ　古典の漢學を研究せんとするものは最も暗誦を努むべきである。今の人は直に日本外史だとか十八史略だとかいふやうなものから讀み始める。又今日の學者先生や教育家先生が之を奬勵して居るのであるが、我輩の見る所を以てすれば、之れは抑々大なる間違ひである。此等の先生達の曰ふに、小供に向て大學中庸や論語孟子などを讀ませるのは抑々間違つて居る。何故ならば大學や中庸の中には政治思想が存在して居る。少年子弟に大學や中庸の中に包含してある所の政治思想が理解せらるべき筈はないからであると。吾人を以て之を見れば、凡て理解といふことばかりが教育の目的ではない。理解といふこ

と許りを努めると人間は小悧巧になるけれども材料といふものを有たない。金の取れる能力を養成するといふことも必要であるけれども、一面に於ては昔よりの寶物を蓄へて置くといふことも必要ではないか。家としては其方が或は尊いかも知れぬ。是れと同じやうな具合に、唯々物を理解する能力があるといふことよりかもやはり種々なることを知つて居るといふことが必要である。兩方面ともに必要である。其点になるといふと大學中庸の如き書物は最も必要である。假令政治思想は子供に分からないにしても、朧氣ながら分つて居る。若し眞に理解せんとする時には大學者と雖もやはり分からない所があるのである。けれども少年子弟が之に依つて漢文の口調を諳記するのみならず、天子といふものは何ういふものであるといふことを知

ることを得。又人間は何ういふ者であるといふことを知つたならば、朧氣ながら理想を與へることになる。精神を高尚にすることになる。殊に古典が一切の淵源となつて居るのであるから、此等を研究すれば漢學は如何なるものに出會はしても理解出來るのである。であるから理解の程度は其人に依つて違ふだらうけれども、兎に角此等の所から始めなかつたら漢學の出來やう筈がない。淵源に遡らないからである。十八史略や日本外史から始めて行くのは末より本に至らんとするものである。簡易より高尚に至らんとするものであるといふ。成程簡易には違ひないけれども簡易が必ずしも簡易にはならない。如何となれば、日本外史を書いた頼山陽の精神は其淵源に於てはやはり大學や中庸に依つて作られて居るからだ。であるから大學や中庸を呑込

四書　大學　中庸　論語　孟子

五經　書經　詩經　易經　禮記　春秋

んでみれば容易く之を理解することが出來る譯である。大學や中庸を讀んで了ひさへすれば最早其根抵を穿つて居るから、少年子弟の精神に於ても甚だ愉快を感ずるのである。去れば書物を讀むから須らく良い物を讀むべし。卽ち總ての學問の淵源となるべきものを讀まなければならない。

大學、中庸、論語、孟子の如きものは、意味の分からぬ所は無論ある。學者先生と雖も容易に理解することの出來ない所がある位であるから少年子弟に分らぬ所あるは已むを得ぬとしても、少くとも素讀に依つて諳記する必要がある。諳記して居りさへすれば漢文の口調が分かるし、又多少意味をも理解することが出來る。諳記しなければ殆んど役には立たない。大學、中庸、論語、孟子の所謂四書を讀んだ後に五經を讀

むがよい。即ち書經、詩經、易經、禮記、春秋が是れである。此等の書物もなか〳〵六ケしいものであるけれども、先づ其等の書物に就て大雜葉に讀まないで鄭寧に讀め、假令意味を理解することが出來なくとも、少くとも素讀だけは出來るやうにして置かなければならない。

□ 諳誦　諳誦といふと今の人は極く馬鹿氣たことのやうに思ふけれども、其實諳誦は最も必要である。書物に書いてあるところだけでは自分の知識とはなつてをらない。書物がなくなつた時には何が何だか少しも分らない。書物は知識ではない、自分の腦髓に收めたものが知識である。如何に澤山な書物が積んであつたからと云ふても、腦の中になかつた日には何の役にも立たない。明き盲目も同然である。演說するにしても諳誦して居らなかつた日には困る。文章を書くにしても、左樣だ。諳誦して居ると居らぬとでは其早さに於て大變な違ひがある。諳誦して居れば便利である。万事諳誦して居れば確實に自分の腦髓に這入つて居るのである。確實に腦髓に這入つて居りさへすれば他のものを讀むと云ふても應用が利くことになる。諳誦と應用とは別のことのやうであつて其實同じである。諳誦しなければ應用と云ふことは出來ないのである。何故なれば腦髓の內に其事がないからである。數學などにしても同じことで、諳誦して始めて應用が出來るのである。公理の諳誦がなかつたならば應用は出來ない。それ故自分は諳誦と云ふことを以て最も必要なることゝする。諳誦と云ふことは長い文章などでは到庭出來ないからして、成る可く短い者を擇ばなければならぬ。然るに學者や敎育家が少年子弟に向つて長

いものを讀ませる癖がある。是れは大なる弊害である。二頁のものを雜に讀ませるより、僅か三行か五行の者を十分に能く讀ませる方が効力がある。朧月夜で物を見るのと太陽の光で物を見るのとは非常な違ひがある。判然と物を覺ゑる習慣を付けないと却て腦髓を惡くする。諳誦は漢學研究の上に於ては第一に必要なることである。

八　一人の文を讀むへし　漢文の格調は人々別であるからして、成る可く一人の文章に就て漢文の味ひを理解することを要する。古典などであれば皆讀んでも差支ひないけれども、後世の人の文になると云ふと成る可く一人の人の文章をよく讀むが宜い。物徂徠の文章と伊藤仁齋の文章とでは調子が大變に變つて居る。又頼山陽の文章と齋藤拙堂の文章ともやはり味ひが非常に違つて居る。自然に分かるものである。是れがつまり格調である。漢文の一種の味である。此点を能く呑込むやうに勉むるには一人の文章を能く讀むに限る。然るに今日の漢文教科書を見よ。様々なものを集めて居る。折角一人の文章で少し漢文口調を覺えたのに他の人のを讀むで直に破壞されて了う。破壞に破壞を重ねて居るから漢文が分かりやう筈がないのである。此點から考へると云ふと、何うしても漢文を研究するには一人の文章を讀むに限る。其一人の文章を土臺として其れから後に少しでも他の人の文章を味つて置くやうに努めて更に數年の後に於ては大に研究することを勉むべきだ。

二　寫本　今日の學生は、書物は廉價に之を得ることが出來るし、其上に種々重寶なる書物も出來て居るから、寫すなどと云ふことは殆んど

馬鹿事のやうに思つて居る。成程書物に依つては寫すのは馬鹿氣て居る。理學の書物などは一度其譯が分かれば決して寫す必要はないのである。數學の書物にしても其意味が分かれば寫す必要はないのである。けれども漢文の書物は是れと違つて居る。漢文と云ふものは支那の文章である。寫すと云ふと手の習慣に於ても其意味を理解することが出來るのである。漢文を寫して反りながら讀んで居るといふと仕舞にはスラ〳〵と漢文が書けるやうになつて來る。自分も中學時代に物徂徠の論語徵などは全體之を寫したことがある。今日美文は出來ないけれども漢文を直に書くことが出來るのは全く寫した爲めである。「其當時寫した者が凡そ百餘冊もある。今に皆保存してあるが寫すことは漢文研究上第一の必要なることゝ心得なければならない。

三　英語研究法

イ　小兒の如く習へ　英語を學ぶのは則ち新しい一つの國語を學ぶのであるから、吾々が小兒の時より次第に日本語を覺えたやうにせねければならない。大人になつたからと云ふて一概に英語が覺えられると云ふ譯ではないのである。却て大人になつた方が覺えにくいかも知れない。

「小兒の如く習ふには何うするかと云ふと、つまり日常卑近のところから始めるのである。日常卑近の事は始終繰返されて居る。隨て始終之を腦髓に想ひ起すから諳誦することが出來るやうになるのである。」例へば貴方とか私とか云ふ語の如き、或は其れがあるとかないと

か、然りとか、否とか、父とか母とか云ふやうな類である。此卑近な語は先づ時々刻々に繰返されて居ると云ふても宜いのであるから、英語を學ぶ者は此等の事より始めねばならない。英語の教科書の上手に出來たものがあれば宜いけれども、多くは英語を大人に教へる氣になつて居るからして面白くない。覺えられない。成程大人と子供とは經驗する所が違ふから大人には大人に適するやうにと云ふことがあるかも知れないけれども、それにしても、吾々日常の經驗に於て、最も卑近なるところの事柄は最も度々繰返されることであるからして、斯の如きことより學ぶことを要するのである。自分も近頃此趣意を以て英語の講義を書いて見たが、初學者に取りて極めて了解し易いと云ふことである。自分の方法であると云ふと、先づ普通の英語は一年間で分かるやうになるし、書物でもあれば百六十頁で一通りの事が分かるやうになるのである。其代りに自分の教へる儘に努力して貰はなければならないのである。

小兒の如く學ぶのであるからして、成るだけ度々之を口に表はし度々之を反覆して始終心を此に注いで居らなければならないのである。何を云ふにも英語を應用するやうにして貰はなければならないのである。

口音讀　殊に英語は音讀を要するのである。兎に角日本文や漢文などは自分達に慣れて居るものであるからして其れ程でもないけれども、英語となると云ふと發音がテンで違つて居るのであるから、音讀して發音に慣れることを要する。其上に耳にも慣れなければならない

のであるからして、音讀と云ふことをせない日には英語は殆んど分からない。朗々ととして之を誦すべきである。西洋人になるには西洋人の如く喋らなければならない。喋るには口を練習しなければならない。發音と云ふことは即ち口を動かすことである。發音せんとしたならば口の練習をしなければならない。

口拍子がよくなると云ふと自然と英語を覺えることが出來る。讀んで意味を理解せんとする時にもやはり口拍子に依りて大に其意味を理解することが出來るやうになつて來る。

八　一字々々の諳誦　英語の第一讀本第二讀本位を讀んで居る時代には英語の意味を取ると云ふことは智慧の問題だと思ふて居る。即ち理解力の發達した者は意味がよく取れるし、理解力の發達しない者は意味が分からない、と、早く曰へば馬鹿には英語は分からないと思ふて居る。けれども是は大なる間違である。成程高尚なる意味でもあれば馬鹿な者には分らないに違ひないけれども、言語と云ふものは吾々の通常用ひて居るものであるからして、普通の人間であれば言語の遣方を知らないとはないのである。馬鹿殿樣でも尙ほ且つ普通の言葉の遣方は知つて居るではないか。思慮淺薄なる婦人の方が却て言葉遣ひなどは上手なものである。英語を理解するにした所でやはり同じことである。西洋にも馬鹿者もあるし悧口者もある。けれども英語としては馬鹿な者にもやはり通用するのである。からして理解力のある人、ない人と云ふことでなくして、唯と英語を知つて居るか知つて居らぬかと云ふことに歸着する。例へば英語でマストナット (Must not)

と書いて「何々してはいけぬ」と云ふ意味だと云ふても、決して理解力の問題ではなくしてさう云ふ習慣になつて居るのであると思へばそれで間違ひないのである、或は英語で少し、小さい、などの意味のリットル(Little)と書いて、少しといふ意味でなく何もないと云ふ意味にするけれども、是れがやはりさう云ふ習慣と思へば間違ひないのである。であるから英語に就て一々の語を諳記しさへすれば、英語は全般を理解するとが出來るのである。理解力の多少如何にあるのではない。斯う云ふとは英語を學ばんとする者の特に注意を要する所である。それであるから英語を學ばんとする者は、先づ普通の動詞なり普通の名詞なりを暗記するに限る。又普通の熟字を諳記するに限るけれども諳記すると云ふとに就て大に注意すべきは物によりて濫りに暗記しては宜くないとである。即ち字引を片ッ端から暗記するには及ばない。何故なれば字引には隨分稀な文字もあるがさう云ふ稀なものを覺えたところで何の役にも立たない。それまりは日常卑近なとから覺えて行けば早い。日常卑近のことは談話の間にも出て來る。今之を數學に就て說明して見ると云ふと、一二三四五六七八九十と書いてある其の中で、一とか五とか七とかいふ數字は最も度々用ひられるけれども、四とか六とか云ふやうな數字は割合に用ひられない。さうであるからして、やはり一とか五とか七とか云ふやうな文字を知つて居る方が都合が宜い。人の使はないやうな文字は知つて居つた所で役に立たないのである。英語でも日常卑近なる、即ち何人も始終用ひて居る所の語を覺えるやうにするが宜い。何人も使つたことのな

いやうな語を知つたからとて何等の効もない。

二　暗記の性質（暗記するのでなく、吾々が日常用ひて居る所のものを暗記するのである。即ち書物であると云ふと大概普通のことが書いてあるのだから、其書物に現れて居るところの語を暗記するやうにして行きさへすれば、次第に功を積んで、仕舞には能く書物が讀めるやうになるのである。）

それであるから英語にしてもやはり暗記が必要である。（一冊の書物を十分に暗記すると云ふと、其次の書物は餘程容易く讀める。更にそれを悉く暗記すると云ふと其次の書物は尙更に容易く讀めるとになる。去れば暗記と云ふことが英語を研究する上の第一の方法であると云ふことを忘れてはならない。）

ホ　英語に親しくなれ　英語にファミリア（親しく）なると云ふことが英語を研究する上の最大秘訣である。英語の書物は毎日々々研究しなければならない。日本語であると左右前後の人が皆日本人であるから何時となく之を用ひて居る、不知不識之を用ひて居る。人と相對して談話しない時でもやはり心の内で用ひて居る。英語となるとさうは行かない。是れが抑々英語の暗記し難い所以である。成るだけ英語にファミリアになる即ち親しくなることを努むべきである。人と話をするにしても英語で話せば宜いのである。けれ共此等のとはなか〳〵出來ないからして、若し出來得べくんば毎日研究するのである。一日に二時間でも三時間でも乃至は三十分間でも宜いから、毎日々々研究すべきである。（支那の孟子の言に一日之を温めて十日之を

冷やすと云ふことがあるが、土曜日に五時間英語をやつても其外の日にすつかり之を讀まぬで居しばやはり忘れて了ふ。それよりかも毎日々々一時間づゝ勉強する方が効力があるのである。而も何れの瞬間に於ても英語を學ぶやうに努めなければならない。

であるから少し書物の讀めるやうになると何でも宜いから讀め。新聞でも宜い、雜誌でも宜い、又小說でも宜い。又或は英語の平易なる書物でも宜い。何でも宜いから努めて英語の書物に眼を曝せ。是れが卽ち英語にフアミリア(親しく)になることで英語を研究する上に於て最も重要なることである。

五官を英語に順應せしめよ　手の筋肉にしても英語を書くやうに順應せなければならない。吾々は漢字や日本字を書き慣れて居るからして、寢て居つてもやはり其手眞似をして居るが、英語の手眞似をすると云ふことは少い。英語にフアミリアになることが出來ない所以である。英語を習ふと云ふと、自然英語の手眞似をするやうになる。又眼にしても英語を一見して直に識別する樣にならなければならぬ。或は口にしても同じことで英語の口調が能く現はれて來る樣にせなければならない。乃至自分の身躰の姿勢にしても人と話をするところの態度にしても、やはり英語に適するやうにならなければならぬ。則ち身體全體を以て英語に適應することを努むるのである。

然るに通常の人は唯眼で英語を見る位に止まつて居る。是れでは迚も分からない。尙進んだところで單に口を以て英語を讀むに過ない。是れでも未だ不十分である。更に進んで或は書いて見る。是れ

でも未だ不十分である。吾人は更に數歩を進めて行住坐臥の間常に英語を用ひんことを希望するのである。

ト　文典の事　文典は英語を讀む上に於ては極めて必要なことであるけれども矢張り讀本から始むべきだ。尤も或る時代に到達すると云ふと、必ず文典を能く學ばなければならない。元來書物を讀むと同時に少しづゝ文典の知識を得て行くと云ふことが必要であるけれども是れ亦好い教科書がないといふと、さう云ふ好い具合に行かない。自分は英語の講義を書いて其中に次第々々に文典を與へるやうに努めて見たが、是れならば先づ比較的に能く分ることであらうと思つて居る。

佛蘭西語とか露西亞語でも習はふと思ふ時には、第一に文典を覺えなければならない。さうしないと迚も書物を讀むことが出來ない。つまり外國語を研究するところの捷徑は簡易なる文典を能く暗記するにある。

チ　古典を讀む事　英語を研究する上に於ても成るべくは古典を研究するやうに努むべきである。即ち昔の書物を讀むのである。漢學でも古典が必要であるけれども、英語でもやはり古典が必要である。セクスピア、ミルトンの如き大家の書いたものが淵源となつて、近世の文學が生れ出たのである。故に淵源に遡つて之を研究するにあらざれば近世の英文學を理解することは出來ない。淵源を研究することを努めんとする者は須らく古典を讀むべきである。

近世の英文學も勿論必要には違ひない。又今日の人が唯〻近世の

ものを論評して面白がつて居るが、眞の學者にならうと思ふ者は斯くの如きことでは面白くない。やはり古いところのものから研究しなければ懇篤なる學者になることは出來ないのである。

リ　英語以外の外國語　英語以外の外國語を學ばんとする者も、やはり以上述べたる所と同じやうな順序であるが、唯〻注意すべきは英語と同時に他の國語を學ばんとする者がある。是れは大に注意すべきである。所謂虻蜂取らずになることが多い。一日英語の本を讀んだと思ふと明日は又佛蘭西語を勉强する。英語の知識が固まらない中に佛蘭西語が這入るのであるから、相互に混同して何時までも進歩がない。それでは宜しくないから先つ三年でも四年でも英語の知識を十分に固めて然かる後に他の國語を學ぶやうに努むべきである。

斯く如き方法にすると云ふと、多くの國語を研究することも必しも困難ではないのである。英語を學べば佛蘭西語は比較的に解り易い。獨逸語は骨が折れるやうであるけれども、是れとても又出來ないことはない。拉典にしても希臘にしても、緻密に讀みさへすれば要領を得らるゝのである。此以外の歐羅巴の外國語は何れも研究し難いことはない。早く研究すれば早く覺えられて十ケ國十二ケ國の出來ないことはない。

又　一國の言語に精通せよ　斯く數多の言語を知つて居ると云ふばかりが人間の能事ではないのである。一國の語でも能く之れを知ると云ふことが最も必要である。何故なれば假令一國の語にしても能く知つて居らなければ書物は讀めない。早く言へば英語の書物を讀

むにしても寢轉んで居て是れが讀めて着々として其意味を理解することが出來るやうでなければ役には立たない。書物を讀むのは何の爲であるかと云ふと、意味を理解する爲めである。一生懸命に字引と首引して讀んで居るやうでは時間が取れて其上なか〳〵意味も分からないからして、成るたけ樂に自由に其意味か分かるやうに努むべきである。それには一國でも宜いからして其言語に精通することを要するのである。精通したか何うかと云ふことの證明は、つまり寢轉んで居つて讀めるか何うかと云ふところにある。

四　各科學問總論

イ　學問の一般を知る事（凡ての學問に就いて唯々其一般を知りたいと思ふ者は其一冊の書物を精讀すれば宜いのである。是れに就いては讀書法の部に於て述べたからして重ねて之を言はない。唯々其一冊の書物を讀むと云ふことが甚だ困難である。此困難には是非共打勝たなければならない。一科の學問を知らんとするには兎に角一冊の書物で間に合ふと云ふことを注意して置く必要がある。

併乍ら此學問に精通せんとしたならば、此方面に關する數多の書物を讀み且又數多の事實を蒐めて後に之が系統を作らなければならないのである。是れは所謂專門學者の事に屬する。

■ 學問研究法　學問と云へば直に書物だと思ふけれども、是れが抑々大なる間違である。書物と云ふものは學問ではなくして學問の現れた所の形式である。如何に其書物を知つて居つたからと云ふても、其れだけで學問を研究し得たと云ふ譯ではない。學問は實際の事實である。であるから、實際の事實を相手として研究しなかつた日には到底學問は成立しないのである。例へば道德學にしても古今東西の道德學の書物を讀んだからと云ふて、それで道德學に達したとは謂へない。日本や支那乃至西洋各國の道德現象を觀察して、それから道德の性質、起源、統一等の諸問題を研究し得て、初めて道德學者となることが出來るのである。たゞ書物だけ讀んで道德學者となつたと思ふ者があるが、是れは書物學者であつて決して道德學者と云ふことは出來ない。唯々書物に道德の事が書いてあるから其れで道德學者と云ふのであるけれども、實際は道德學者と云ふよりかも書物學者と云ふた方が適當である。或は又動物學にしても然うである。總ての動物の書物を讀破つた所で、實際の動物を見なかつた日には動物學者とは云へないであろう。世界には幾種類の蝶があると云つても、其蝶を見ないで唯々書物の上で知つて居るだけであつたならば、是れは動物學者ではなくして動物の書物學者と云ふのである。若し其書物を知らなかつた所で、世界中の蝶を集め來つて、其中に於ける相互關係や又は進化の法則などを知る事が出來たならば、是れは實際の動物學者と謂ふべきである。一冊の書物も讀まないからと云ふても、其種類の事柄に就いての智識を充分に呑込んで其れを統一組織しさへすれば則ち學

者となることが出來るのである。

唯々書物と云ふものは多く從來の人が事實を基礎として作つた所のものであるからして、其書物を讀みさへすれば自然其等の事實が分る。隨つて自分の參考になる。自分が新たに事實を見て編輯した丈では欽點もあるから、先輩諸氏のやつた所を以て參考にするといふと大に自分の欽點を補ふことが出來る樣になるのである。そこで書物を讀む必要があるのである。けれども書物だけに限られて了つた日には本當の學問が出來やう筈はない。

社會學者と云ふた所で、單に社會學の書物を讀んだ丈では決して社會を研究する人になることは出來ないのである。社會を觀察して見て其社會が如何にして變動するか、如何なる方面に向つて進歩しつゝ

あるかと云ふやふな問題を研究しなかつた日には迚も學者となれない。やはり社會の書物學者となつて了ふのである。

斯の如き譯であるから、書物學者と活學者とは自ら區別がある。活學者と云ふのは活物を相手にして居るものと謂ふても宜い。書物學者は單に記錄せられたる文字を相手にするものと謂ふても宜いのである。實際の事柄といふものは始終變動して居るものである。其の變動して居る所のものを相手にするのであるからして、是が本當に活きた學者と謂はれるのである。

書物だけを相手にすると云ふ學者と云ふ者は死んだ樣なものであるけれども其中でもやはり死んだ活きたといふ區別がある。青年諸子は須く事實材料を蒐集して

之に依りて大に研究することを力むべきである。さりとて前にも言つた樣な譯で、先輩諸氏の言つたことを參考する必要があるからして、大に書物を讀むと云ふことも亦忘れてはならない。

八　實業家も亦學者たれ　實業に從事する者も政治に從事する者も亦學者たり得るのである。例へば實業に從事して居る者で自分の實業方面に於て總ての知識を集め得たと假定して見よ。やはり其方面に於ては相當な學者となることが出來るのである。豚の飼養法を研究する者が此方法に就いて種々に工夫し初めて完全なる方法を發見し得たと假定せよ。それだけ遙か其方面に於ける學者となるのである。實業家にしても如何なる場合に於て商賣が繁昌するか、如何なる場合に於て不景氣が起るかと云ふことを研究し得たと假定して見よ。

其方面に於てはやはり學者である。唯々實業家乃至一般に社會の實際家といふ者は、實地經驗の上の知識があるにしても纏まつた知識がない。此纏まつた知識がないと云ふことが即ち學者としての資格を缺乏する所以だ。であるから成丈け纏まつたる所の知識を得る樣にするには其實地に經驗し見聞したる所を集めて、それから自分の腹の中に一種の眞理を作るのである。其の眞理が實際に當つて能く之を應用することが出來る樣になれば、其眞理はつまり材料なり事實なりに依て作られたものであつて、其れ自身總ての人が受取つて總ての人に効力あるものであるから、學者が書物を讀んで澤山の書物を知つて居ると云ふより活學問をしたことになる。

活學問と云ふと本當の學問でないと思ふが大なる間違である。書

物を讀んだ所で、唯〻讀んだと云ふだけでは何の役にも立たない。活きた字引になつて了ふ。人に重寶がられるだけのことである。それよりかも一ッの眞理に想到して、總ての人が此の眞理を實行しさへすれば必ず商賣が繁昌すると云ふことを考へ得たと假定せよ。其の人は社會に取つて如何なる恩人であらうか。此点から考へれば是れが即ち眞の學者である。書物を讀むばかりが學者であると云ふのは封建時代漢學が勢力を占めて居つた時代の事である。一の尙古思想に過ぎないのである。

徳川時代の學者先生と云へば單に書物を讀んだ丈けの者である。一字々々に書物を切り取つて實際に飲んで覺えたなんと云ふ學者もある。之を以て學者として居つた。千萬卷を讀破ると云ふことが學者の能事であると思ふて居つた。けれども今日の學問に對する考は斯の如き幼稚なものではない。學問と云ふものは文字ではなくして眞理に到達する事である。徳川時代に於ては眞理が既に漢學の書物の中に包含されて居ると思ふたので、此の書物を讀んだ者が眞理に到達して居ると思ふて居つた。けれども徳川時代の所謂眞理は道徳上の眞理である。道徳上の眞理は既に書物の中に書いてある。けれども道徳ばかりが眞理を有つて居るのでなくして、其他の現象も皆眞理を有つて居る。其他の現象を如何にして研究するか。從來の漢學の書物を讀んだ所で決して此眞理に到達することは出來ない。どんなに漢學の書物を讀んだ所で商賣の繁昌する方法を考へることは出來ない。又病氣を治す方法を考へることも出來ない。漢學の書物だけに

眞理が包含して居るのではないといふことは明々白々である。眞理と云ふものは各方面にある。各方面に於て研究されなければならない。そこで西洋人の學問に對する思想は大に變はつて居る。即ち學者といへば事實を集めて其事實に依つて眞理に到達した者が即ち其れである と云ふやうに思ふて居る。是が本當の學者であらう。此の論法から推して見たならば則ち前に言つた所の實業家にしても乃至一般の實際家にしても其方面の知識を集めてそれから一種の眞理に到達することにすれば則ちやはり其方面の學者と謂ふことが出來るのである。其方面の先生である。それにも拘らず世間の人々が學者と云へば單に文字にのみ接近するものと思ふて居るのは大なる心得違である。

若し文字に接近する者は皆本當の學者であると假定して見よ。それならば博言學でもやつて世界各國の文字を知り居る者が是が本當の大學者である。彼のスペンサーを見よ。スペンサーは十九世紀に於ける世界最大の學者と稱せられて居るではないか。其スペンサーは獨り英語を知つて居つたのである。日本人でいへば日本語を知つて居ると云ふのみで、外國語は知らなかつた。それでも世界最大の學者となつたのは何であるか。即ち各種の方面に關する實際の事實を蒐めて其れから一種の眞理を抽象することが出來たからである。之に由つて見れば則ち文字を知ると云ふことばかりが學者の能事ではないと云ふことは明である。

是故に實業家にせよ實際家にせよ。學者でないと云ふことを憂ふる

な。唯〻自分が其方面に於て本當の知識を積めば卽ち學者であるといふことを考へよ。且つ其眞なる所の知識と云ふものは多數の人が直に之を實行に現はして見て實際に効力あることを要するのである。此の點になると云ふと本當の學者になれる。唯〻書物を讀んだる者よりかも實際家實業家の方が眞正に所謂學者であるかも知れない。

二　學問の空氣　人間は大氣の中に生活しながら其中に生活すると云ふことを知らない。而も空氣が惡ければ身體に害がある、良ければ則ち利がある。此等の差別があるにも係らず空氣其ものに就て吾々は深い考を有つて居らない。所が學問に於てもやはり此種類の空氣があると云ふことを忘れてはならない。此空氣は實に大なる働を爲す所のものである。今日本に種々なる學問の起つたことを考へて見よ。先づ德川時代に至つて藤原惺窩が主として程朱學を唱へた。而も王陽明や陸象山或は佛敎なども捨てなかつた。是れ大に注意すべきである。所が門人林羅山に至つては則ち同じく朱子學を取りながら朱子學を取らずして却て陽明に贊成する所があつた。更に降りては山鹿素行や安藤省庵、伊藤仁齋、物徂徠の如き、何れも日本で古學を主張した者である。支那に於ては後世の新註が惡いと云ふ者がなく、而して日本に於て初めて之を非難攻擊する者が起り來つたといふことは實に注意すべき現象である。

抑も此注意すべき現象の起り來つた所の由來如何と云ふに、之には大なる原因がある。先づ第一に支那と比較して之を述べなければならないけれども、支那に於ては程朱陸王の學は旣に長く行はれて居つ

た。或は程朱學を學ぶ者があり、或は陸王の學を學ぶ者があつた。其等の潮流が長く流れ來つて居るものであるからして、學問をしやうとすると、或は程朱學になるか或は陸王の學になるか、孰れかに分かれざるを得ないのである。又次ぎには子弟傳承と云ふことがある。即ち先生が程朱學をやると云ふと弟子も亦程朱學をやると云ふ樣な具合であつた。第三には地理的關係である。即ち王陽明の鄕里に生れた者は皆朱子學者になつて了ふ。此の如き譯であるから、支那に於ては、程朱になるか陽明學になるか、自から分かれ來らざるを得ないのである。是が則ち支那に於ける學問的空氣と謂ふべきである。支那人は此中に呼吸して居るのである。

然るに我國はこれと趣を異にして居る。未だ程朱學をやつたる人がある譯でもなく又程朱や陸王が日本に生れた譯でもないからして、少しも斯くの如き潮流がなかつた。此故に自由に外國の思想を取來つて之を批評することが出來たのである。簡單に言へば其等學問の空氣がなかつたのである。空氣がないから其等學問の空氣に感染するといふことをなかつたのである。此點は大に面白い事である。日本哲學史を解釋する者は須く此点を理解しなければならない。是が卽ち日本哲學史を根抵より理解する所以である。之を知らずして日本哲學史を理解しやうとするのは恰も木に緣りて魚を求むるの類で到底望みのないことである。

故に日本に生れたる所の學者は必ずしも程朱に偏することなく必しも陸王に偏することなく、或は又必しも程朱や陸王に據るといふこ

それはあのりでない
のぢやないですか？

ともなく、唯々己れの好む所に隨つて發達したのである。學問的空氣が豫め人心に浸潤することのないといふ明證である。

徳川時代の學者が學問を以て一家相傳として居り、學者の家には學者が出來るし、學者でない家には學者が出來ないと云ふは何であるかと云ふに、詰まり學問の空氣の有ると無いとに過ぎないのである。昔は書物が不自由であつたから、學問をしようと思つても書物がない。なければ學者にはなれない。所が親が學問した家では種々なる書物が集められて居るから子供が不知不識の間に書物の名を覺えたり不知不識文字を覺えたりする樣になる。即ち學者の家に學問の空氣が存在して居つたといふことが畢竟彼等をして學者たらしめたのである。武士には自から武士の一種の空氣とが存在して居つた。やはり武士の家に生長した所の子供は何となく品好く、何となく武士らしい所があつたのである。今日に至つても昔の武士は尚且つ其容貌態度に於て自から違つた所があるといふのは長く其空氣に感染せられたるが爲めである。此故に家庭教育といふことは餘程意味があるのである。實業家の家に成長するといふと、自然と實業の方面に趣味を有つて來る。周圍の空氣が自から學問的になつて居る家に成長すると、やはり何となく學問の空氣を帶びて來る。子供の時代からして這入つて居る所の家に依つて其成長發達の上に大なる相違が出來て來る。假令實際の書物を讀まないにしても何となく學問の影響を蒙つて來るといふことは明かなる現象である。

此故に學問をしやうと思へば必ずや學問の空氣を作ることを力め

なければならない。例へば一種の學問を研究しやうと思ふたならば、其學問に關することを成るたけ多く集めて來るのである。己れの坐つて居る前後左右は悉く其の種類のことを以て充滿させるやうにせよ。さうなると己れの氣分が自から亦其處に向いて來るのである。人間の精神は他より餘儀なくされるといふことが大分ある。孟子が居ると氣を移すと曰ふたけれども實際客觀的なる狀態に依りて變ぜられるといふことが澤山ある。此點が卽ち漢學を研究し英語を研究する上に於て必要なるのみならず、學問を研究する上に於ては特に必要なことである。

ホ　暗記の學と理解の學　物理學化學の如きものは理解を主とする所の學問である。道理が解りさへすれば宜いのである。英語や漢學の如きものは主として暗記である。理解の學問は總て靜慮默考することを要する。此點に於ては最も猛烈に精神を集中して十分に思考力を費やさなければならない。さりとて化學にしても物理學にしても全然記憶を要せぬと云ふ譯ではない、矢張大部分は記憶を要するのである。例へば數學の方程式は記憶して居らなければならない。記憶して居りさへすれば直に之を應用することが出來るのである。物理學にして矢張公理を記憶して居らなければならない。之を記憶して居りさへすれば應用することが出來るのである。一種の理論を記憶して居れば則ち其それを以て他に應用することが出來る。斯の如き譯であるからして、理解の學問と雖も亦暗記を要するといふことは言ふまでもない事である。

へ　練習の學問　體操の如き、習字の如きは、要するに練習の學問である。大に練習すべきである。斯の如くしさへすれば卽ち其道に於て上達するのである。けれども矢張記憶を必要とする。如何となれば習字にしも其筆法とか文字の形とかいふ如きものは、矢張記憶に在るのである。例へば春といふ文字は如何樣に書けば形が好いかといふことを一度敎はつたら忘れてはならない。それだけ遙か暗記である。筆法にしても如何樣にすべきかといふことは矢張暗記であるのであるから習字や體操の如き練習のものにしても同じく暗記を要するのである。

ト　暗記　斯くの如き譯であるから暗記といふことが總てに行渡つて最も必要なることである。暗記力といふものがなかつた日には何事をも成就することは出來ないのである。けれども暗記だけが唯一の仕事でないといふことも亦記憶すべきである。精神力の中には諸記力もあり、想像力もあり、又理解力もあり判斷力あり頓智もある。諸記は其中の唯〻一能力である、唯〻必要なるものと云ふだけである。其外の能力がなかつた日には、精神としては不完全である。想像力と云ふものは何であるか。卽ち實際にないことであつても大に想像して、千里の天を走るが如き或は水上を行くが如き皆是想像の力である。印度の傳說が種々樣々な想像物を有して居るのは皆是印度人の想像力が強いといふことを示して居るのである。卽ち「隱逸傳」等にある如きものは何れも想像である。判斷力と云ふのは卽ち此現象が如何なる種類に屬するかといふことを判斷するのであつて、從來得たる所の知

識を以て新に遭つた所の現象を判斷するのである。頓智といふのは其場々々に應じて起り來たる所の意思作用である。臨機應變の作用である。推理力と云ふのは三段論法の如くに、此理より推せば斯の如くなると云ふ譯で、更に前の方に進むところの一種の作用である。如何に推理の力判斷の力が發達して居つても所謂想像力の發達しない者がある。頓智の發達しない者がある。理窟張つた者は詩を作ることが出來ない抔と云ふのは即ち是れである。されば自分は記憶力と云ふものゝ必要は信ずるけれども其れ丈を以て人間の能事了はれりとは思はない。學問を研究するにしても其れ丈を以て完全とは思はないのである。

チ　外國語の必要　今日の時勢に方つては必ず外國語を知らなければならない。英語でも宜い、獨逸語でも宜い、外國語を知ることに依りて無限の知識の庫が開れるのである。英語でも宜い、獨逸語でも宜い、佛蘭西語でも宜い、何でも宜いから一つの外國語を知るやうにせよ。日本語だけでは不十分である。

極くつまらない事のやうであるけれども、先づ利益と云ふ方面から見ても日本の學者は大概西洋から知識を仰いで居るのである。自分の研究と云ふものは少い。勿論ある人もあるけれども、多くは外國の書物から其知識を仰いで居るのである。故に外國の書物が讀めざへすれば日本に於ける多くの先生と同じやうな知識を得ることが出來るのである。其上に種々なる書物を研究して種々なる知識を得ることが出來るのである。必ず外國語は之を研究せなければならない。

五　精力利用法

イ　力を勞する事少くして功を收むる事多し　總て吾人は成るたけ力を勞すること少くして功を收むること多からんことを希望する。焦り〳〵て活動したからとて其割合に功のないことが多い。それよりかも初め篤と考へて一定の計畫を立てゝ之に從て着々歩を進むれば則ち力を勞すること少くして功を收むることが多い譯である。是れが知慧の有ると無いとの違ひである。同じやうな仕事をして居る者でも働く割合に効力がないといふのは詰らぬことを繰返して居るが爲めである。即ち何等の見込が立たないのに無闇に繰返して居るだけであるならば、どんなに働いても其効はない筈である。然るに十分考へて非常に好い方法を發見した後に着手するといふ風の人は力を勞すること少くして功を收むることが多いと云ふことになる。

支那の老子の哲學は則ち是れである。此事に就ては自分は種々なる方面に於て述べたからして、今茲には極く簡單に其一班を述べるだけであるが、老子は水を以て人間の行爲の標準として居る。水は方圓の器に隨ひ、圓に入れゝば圓くなり、四角に入れゝば四角となる。斯くの如く柔順であるけれども而かも好く萬物を利益して居る。其効力の偉大なる點に於ては之に及ぶ者はない。一面に於ては斯くの如く強い所もある。「柔かい所があるが爲めに能く斯くの如き大なる事業をなすことが出來るのである。茲に於てか老子は水を以て行爲の標準となし、柔能く剛に克つと云ふことを以て根本として居る」。柔道にし

ても、負けることを以て宜いとする譯ではないが、押して來れば押さるゝまゝに退かる。そして先方の力で先方が自然に倒れるやうにする、即ち柔能く剛を制するのである。或は又敵と鬪つても、唯々逃げることを力め敵をして自ら奔命に疲れしむると云ふのも亦柔能く剛に克つのである。斯ういふやうな心持がありさへすれば卽ち智慧が發達して來る。智慧が發達して來ると云ふと能く策略に於て人に勝つことが出來るやうになる。是れ卽ち老子の根本思想であつて、精力を割合に使はないで而も功を收むることが多い。是れは精力利用法として恐らく第一のものであらうと思はれる。一言に約すれば、精力を利用せんとする者は須らく大に智識を勞して自己の爲すことが其要点に當るやうにすべきである。

□ **食物の事**　精神主義の人は美食するには及ばぬといふ。料理屋の食物を食ふなどゝいふ必要は少しもないけれども、大に活動せんとする所の者は身体精神の力を養成しなければならぬのであるから、滋養分を攝るといふことには最も注意すべきだ。旨い物を食へと子供に勸めるのは愚な話である。其必要はない。けれども滋養分を攝るといふことは昔の人もやはり之を認めて居つたのである。野菜料理といふて野菜だけで生命を維ぐ人もあるけれども大々的に活動する人の身體を養ふには足らない。やはり鷄卵とか牛乳とか乃至は肉のやうなものが必要であらう。養生が人間の精力に取つて効のあるといふことは、今日の老人達でも養生に依つて長命して居る者が澤山あるのを見ても分かる。

又食物は餘り度を過ごさぬ方が宜いやうである。元來日本の食物の不都合であるのは飯の外に菜といふものがあることである。飯を何杯と極めて居つても、時に依つて菜が四皿も五皿も附く。そうすると案外餘計食ふことになる。是れでは胃の爲めに惡い。日本の食物に於てはやはり菜本位にする方が宜い。卽ち飯は單に麵麭の代りに食ふやうにすべきである。菜を食つて、それにて腹の脹らない時に飯を食ふ。飯は單に菜を調和するといふことにして置く。菜が少なければ飯を多く食ふ。菜が多ければ飯を少く食ふといふやうな具合にすると、常に腹の平均が保てるやうに思はれる。自分も數年前までは一食に七八杯位平らげたこともあつたけれども、さうなると如何にも胃が膨脹して快くない。其後段々經驗して以上のやうなことを悟つた。

鶴の胃囊は何時でも八分目と云ふことだけれども長命する人は大概貪食しない。つまり八分目位の所で止めて置くのである。

更に間食と云ふことは大に慎むべきである。胃囊の具合が惡くなるのは一つは間食の爲めである。間食も一日一度なら時間を擇んで行へば少しも差支はない。けれども時間を擇ばずに仕切なしに間食するやうであつては迚も身體の健康の保てぬのは明かなることである。

八　早起の事　早起が衞生法であるといふことは昔より云ふ所である。殊に大和民族は神事は朝日の豐榮昇（トヨサカノボ）るの瞬間に於て行ふといふ位であつて、早起の習慣があつた。早起しても三文の得（トク）がないなどゝ言ふけれども、身體の爲めには早起が宜い。夜は洋燈を點けたり蠟燭

を點したり火を焚やしたりするから空氣が宜くない。其中に於て長く起きて居るよりも寢て了ふ方が宜い。

朝寢といふことは道樂者の爲す所である。花柳の巷に出入して夜晩くなるからして遂に朝寢をするやうになるのである。一般人は此習慣が好いと思ふて眞似をするのである。

第一洋燈や電燈の光の下に何時までも起きて居るといふことは不經濟である。朝早く起きれば宇宙の大電燈が光つて居る。其下で書物を讀むかり仕事をするなりするが宜い。人間の造つた洋燈や電燈で書物を讀めば其損害果して幾何であるか。世界全體に於て測り知る可からざるものがある。フランクリンが憤慨したのも固よりである。朝方障子に日光の映るのを見て横になつて臥て居ることの出來るやうな人間は餘程腹の太い人間である、さもなければ良心の麻痺した人間である。何となれば光陰のみならず、電燈や洋燈を點けつぱなしにして寢て居ると同じことであるからである。人情のないと甚しい者である。

二　精力轉換　同一の事許りして居る時には、一面に於ては容易くなるといふこともあるけれども、他の一面に於ては却て麻痺するといふこともある。機械的の仕事であれば同一のことをやる方が仕易いに違ひない。けれども精神を勞することになると同一のことではなか〳〵やり惡い。機械的は精神を勞さない。唯々身躰を動かすだけである。同じやうに動かして居れば其筋肉が發達して少しも疲勞を感じない例へば車を輓いて居る者は車を輓くことは樂に感ずる。其外の仕事をす

ると苦しく慣れたことが一番爲し易いのである。書物を讀むにしても同じである。學者は勞働することは出來ないけれども、書物を讀むことならば朝から晩までも辛抱が出來る。其書物にしても興味のあるものならば宜いけれども、興味のないものであると、種類を變へないと出來ないことがある。乃至一般に書物其ものに疲れることもあるからして、書物を讀んで疲れた時には、晴耕雨讀と云ふやうに、いくらか氣儘にするが宜い。雨が降つたならば書物を讀み、晴たならば田畑に出て耕作すると云ふやうな具合にすると餘程精力を利用することが出來る。書物でも餘り同じ種類のものばかり讀んで居ると疲れる。其時に種類の違つたものを讀んで目先を變へると云ふことも必要である。何か一つの事をやつて居つて、非常に疲れたならば他の仕事をするやうにせよ。一軒の家を持つて居る以上は或は田園もあり、或は動植物もあり、又は家内の仕事もある。種々なる事柄があるから、一つに疲れたならば他の仕事をやるやうにすると精力を利用することが出來て、各々能く其効果を收むる事が出來る。歴史上より考へて見るに一時代が哲學に於て長すると云ふと、其の次の時代には哲學はかくなつて了つて文學が興つて來る。又考證學が興つて來るといふ具合である。考證學が大に興つた後には宗教的思想が勃興すると云ふやうなこともある。歴史上に於ても人間の精力には限りがある者と見えて、一方面に何か發達すると其方面の疲勞を感ずるのである。一個人に於ても同じことで、一方面で疲れたからと云ふて他の方面も疲れて居る譯ではないのである。精力の轉換と云ふことは茲に於ても最も注

意を要する。一言に約すれば則ち氣を變へるのである。

ホ　身體の健全　身體が健全でなかつた日には到底精力を發揮することは出來ない。身體が弱くなると云ふと、大に爲さんとして居つた仕事も遂には之を止めて了ふやうになる。大々的に活動せんとする者は大々的に身體の健全を期すべきである。今日の社會に於ても健全なる人間がやはり大成功をなして居る。大成功をなして居る人間で虚弱な者は殆んどないと云ふても宜い。昔よりの人物を見た所で、やはり偉大なる仕事をした者は何れも身體健全にして精力衆に優れた者である。身體を健全にするには如何にすれば宜いかと云ふと、それは前にも云ふ通り、食物の節制、早寢、早起と云ふことが必要であるけれども、尙其外に於て力を增すやうに運動することを要する。時に依りて或は機械體操も宜いであらう、或は角力を撲ることも宜いであらう、或は田畑を耕作することも宜いであらう、或は徒步競走も宜いであらう。種々樣々なることがあるが、何れも自分の向上發展と相關係するやうな風にやるが宜いのである。唯々運動ばかりに熱中して了つた日には、運動の方ではチャンピオンになれるだらうが歷史上に名を殘すでもなく、社會に於て偉いと云はれる譯でもない。運動のチャンピオンが社會に於て勢力を占めて居るかと云ふにさう云ふことはない。是れは書生の第一に注意すべきことである。是れと同じく餘り時間の掛かる遊戯はしない方が宜い。何故かと云ふに、遊戯に長じたからと云ふても其方面で名を擧げると云ふことも出來ないのであるから、此等のことは極めて簡單にして了つて、成るたけ自分の向上發展を害さ

おいようにするが宜いのである。十にも向上發展二にも向上發展と、芸を以て唯一の心懸として居らなければならない。

路を歩くにしても成るたけ活潑に歩くべし。歩くこと其のことが既に運動になる。散歩などは効力がない。病人でもやはり散歩する。飛ぶとか跳るとかしなければ効力はないのである。斯くの如くにして心臓を健全にし、呼吸器や消化器を健全にし、乃至下體部を健全にするにあらざれば大々的に精力を發揮することは出來ないのである。今日の人が四十位で隠居すると云ふことは万々が一にもない。六十にあつても、七十になつても、隠居と云ふことは許せない。否寧ろ死ぬまで活動しなければならぬのである。身體の健全は是れ最も努むべき所である。

身體の健全と云ふた所で是れ亦餘り神經質になつてはいけない。風邪を引いたからと云ふて直ちに死ぬだらうと思ふて恐れて了ふやうでもいけない。少しの風邪位は押して了つても治らぬとはない。病氣に神經質になると身體もやはり健全にならない。假令身體には病氣がなくとも精神に害がある。所謂一種の委縮病が生じて來る。身體の健全と云ふとは是れ最も人間の希望する所であるが、是れが爲に清潔と云ふとも亦必要に違ひない。垢に食はれて居ると身體の爲にならない。去りとて又度〻湯に這入ことばかり努めるのも宜くない。人に見えない部分だけは十分に清潔にするが宜い。露出して居る部分は不潔であつても多寡の知れたことである。何でも内部よりして精力の溢れ出づるが如くに身體を保つやうにすべきである。

大に飢えて大に働け　大に飢えると云ふ經驗がなければならぬ。旅行しても腹が減たら直ぐに食へる直ぐに飲めると云ふのでは爲にならない。夕刻になり、日は暮れる、けれども何處に旅舍があるか殆んど當がないといふやうなことが人間に取つて最も好い經驗である。斯くの如く大に飢えたる經驗のある時には少しのことは辛抱が出來るやうになる。又大に働いて殆んど身體が仆れる、殆んど死んで了ふといふ位までに働いて見るといふと少しのことは辛抱が出來るやうになる。所謂富貴の子弟雪霜に逢ふことなしに獨活の大木の如くに成長したものは役に立たぬといふのは卽ち此處である。少しの事件が起つても忽ち挫折して了ふ。

孟子が天の將に大任を是の人に降さんとするや、必ず先づ其心志を苦しめ其筋骨を勞せしむと曰ふたけれども、つまり肉體を勞するこが人間をして精神を修養せしむることになるのである。大々的に肉體を使ふときには乃ち大なる困難に堪へることになる。大なる困難に堪へるときには卽ち意志も強くなるのである。精力を養成する所以の最も必要なる方法は實に此點に存する。

六　學校に於る讀書法

イ　學科に依りて違ふ　學校の生徒が學校の事を勉強せんとするには、學科に依りて大に其方法を異にして居る。學校に於ける學科は、或は算術物理の如く、理屈を考ふるものもあるし、又習字や體操の如く比較的考を要しないものもある。けれども、先づ一般に言へば、學校の學科は先生が講釋をして聽かせる、委細に説明して聽かせるものと思へば間違ひないであるから、先生の言ふことが能く分かるのが必要である。先生は固より已れの腦髓の中に於て十分ハツキリした事を述べられるのであるから、其事は生徒の腦髓に十分徹底すべきである。徹底しさへすれば則ち學校に於ける學科の勉強は行き屆いたものと謂ふべきである。

ロ　ノートブック　學校の生徒といふても、程度に依りて大に違ひがある。小學校や中學校の下級の方では勉強法などいふことに就て考ふる必要もないが、比較的上級になつて來たり又は專門學校に於ては最も勉強法に就て考ふる必要がある。今日日本に於ける學校の生徒は、一般にノートブックに書込むことを以て主なる仕事として居る。又は先生の言つたことを書物の中に書込むことを唯一の能事として居る。只管ノートブックに書込むことをのみ注意して居つて、まるで機械的である。何等先生の言ふことが分かるのではない。唯々先生の言ふことを書込む、殘すところなく書込むことばかりに努めて居るのである。

元來講釋といふものは其人に適し其場に適するやうに行ふものである。隨て或る場合には生徒が分からない顏をして居ると、何回も繰返して說明することもあろう。又生徒が倦きたと見れば何か外の世間話をして見たり、面白い話をして其場の氣を轉ずることもあらふ。講釋を筆記すれば其の儘直に書物になると思ふのは大變な心得違ひである。又或る場合には前既に出たことを、再び親切鄭寧に講釋して居ることもあろう。卽ち往々重復もあるけれども、是れとても講釋としてと非難することは出來ない。大勢の中には能く分からない者もあるからして幾回も說明をするのである。

斯ふ云ふ譯であるから、敎場の講釋に對しては筆記することにのみ努めないがよい。講釋は卽ち生徒の爲めにするものである。書物とは違つて居る。其時に依り其處に依り生徒に分かるやうに講釋をして聽かせるのであるから自分の腦髓に分かるやうに力めなればならん。機械的にノートブックに書込んだところで少しも意味が分つて居るのでない。一字一句の間に於ける意味は分かつたにしたところで全體に於ける意味卽ち前後の連絡などの分かる筈がない。それも毎日家に歸つて之を讀めば宜いけれど、試驗前になつて一度か二度讀むだけでは、自分の腦髓に這入る部分が極めて少ない。這入つたにしたところで極めて淺い。

であるから、ノートブックに書込むことばかりを主にしてはならない。今の學校はノートブック作製の場所である。各大學の敎場などに何百何千の學生が居るけれども、何れもノートブクッを作製しつゝ

あるのである。隨分馬鹿氣たことである。是れでは學校としての效力が殆んど失はれて居ると云ふても宜いのである。それだけの時間を無駄に費やして居る。極端に云ふと何百何千乃至は何萬の學生が學校に居る間は殆んど腦髓の半分すらも勞さないで居るのである。日本に於ける精神的勞力の不經濟も此位甚しいものはないであろう。

ハ　ノートブックの書物　ノートブックに書込んで居る間は夢中である。一生懸命に一字一句落さないやうに努めて居るけれども、一年の後にノートブックを作り上げて、綺麗に製本して置いて、偶〻市中でも散歩すると云ふと、豈圖らんや是れと同じ樣な著書が譯山に出版せられ既に社會に公にされて居る。之を見ると云ふと何の爲めに一年間筆記したのであるか、殆んど意味が分からなくなる。それだけの勞力を以て外のことを勉強すればよかつたと云ふ氣になる。

斯う云ふ譯であるから、如何なる態度を以て教場に出づべきか。之を研究する必要がある。先づ其學科例へば動物學なら動物學に就て其先生に著書があるならば其著書に依りて能く讀んで置くが宜い。十分に之を咀嚼して置くが宜い。其力を以て教場に出ると云ふと先生の言ふ所が能く分るやうになる。一言一句も分からない處はないやうになる。斯うなれば初めて自分の腦髓に收まつて來るのである、であるから事は唯〻勉強を要するのみである。

所がなか〳〵斯樣な風に勉强すると云ふ者は少ない。「偶々是れあれば則ち非凡なる學生となるのである。さうして先生の言はれるとを靜かに鄭寧に聽いて居つて、己れの意に會つたところをノートブッ

ク に書留めるやうにすると教場に於て既に分かつて了ふから、試驗前になつても故らに勉强する必要はなくかつて來る。勉强するにしても自分が特に注意して置いたノートブックに書込んだ部分だけを見ればよいから勞力も少くして善い知識が得れらるのである。

斯く言ふと日本の學生は皆言ふであろう。なか〳〵一々學校の先生の書物を讀む暇はないと。是れが抑々間違ひである。例へば學校にすれば夏季休業もあり冬季休業もある。此等の時に於て新學年に行はるべき學科に關する書物を讀んで置けばよい。手廻しのよいとわるいとの違ひである。本當に手廻しがよい者であるならば斯くの如くするに違ひない。多くの學生は學校を馬鹿にして居る、無精にして居るからして、遂に遣り損ふのである。

二　外國語勉强法

外國語を勉强せんとする時には下見が必要である。多くの學生は下見と云ふことをしないで漠然教場に行く。故に教科書は之を手にして居りながら、今日は十三頁から講義をすると云ふた所で初めて其部分に御目に掛る。であるからマルツキリ勝手が分からない。勝手が分からないからして先生の講釋を聽いても能く腦髓の中に收まらない。であるから眞に勉强せんとする者は殆んど一言一句分からない處はないと云ふやうに下讀をして教場に出よ。さうして先生の講釋を聽いて居れ、先生の言ふところが一々能く腦髓に收まつて、成程々々と思ひ合はされて行く。此成程々々と思合はさる所に初めて自分の眞の知識が出て來るのである。是れが外國語を勉强する者の第一の秘訣である。斯樣にするといふと教場へ出るの

に極めて氣が輕い。氣が輕いやうになると恰も高きより卑きに臨むが如き感がある。先づ少し語弊はあるが批評的に聽くことが出來る斯ういふやうな態度を以て聽いて居りさへすれば腦髓に收まらぬといふことはない。是れが外國語勉强法の最大秘訣である。

ホ　著書のなき先生　前に述べたやうに、著書のある先生であつたならば其著書を讀んで行けば教場に於ける講釋は易すく分かる。著書のない先生は何うかといふと是れは已むを得ぬからして何の人の著書でも讀むで其學科に關する知識を一通り得て行くより外ないのである。さうして教場に行つて先生の言ふ所を聽いて居れ。一々書くといふことは主にしないで、唯々自分の心に感じたところを書いて記るして置くといふ樣な工合にせよ。

ヘ　數學勉强法　數學にしても同じことで下讀が必要である。十分に能く下讀をして、是れは何ういふ譯か分からぬといふ處があれば其の儘疑として之を殘して置くやうにする。左樣すると教場に行いて先生が一口言つた所も深く身に泌みるやうになる。孔子が「憤せざれば啓せず悱せざれば發せず」と言はれたことがあるが、憤するといふのは口に言はふと思つても言ふことが出來ないで如何にも殘念だと思つて居る狀態である。悱せざればといふのは、心に斯うであると思ふても好い工合に納得することが出來ないのを憤ふる狀態である。であるから、憤する悱するといふのは、譬へて見れば柿の實が熟して赤くなつて將に落ちんとするやうな有樣である。少し動かしてやれば落ちてしまふ。孔子が啓する發するといふたのは卽ち此点である。教

場に出る者は常に此態度を執らなければならない。教場へ行つたならば此疑を晴らさう彼の疑を晴らさうといふやうな工合に深く心に氣構へて居れば、教場に行いて趣味もあるし、腦髄に能く這入る。是れは數學ばかりではない總ての學科に於てさうである。英語や獨逸語等の外國語は毎日下見をして行くのとしないとでは、一年間には殆んど一級と二級との相違が出來て來る。卒業生に依つて非常に能く讀めるのもあるし、讀めないのもある所以は全く此点に存在するのである。事は唯々勉強にあるのみだ。

ト　ノートの整理　前に述べたやうに教場で先生の言はれることを悉く筆記するは吾輩不賛成であるけれども、若し事情已むを得ず筆記するとすれば、家に歸つて其ノートの整理をすることに努めなければならない。即ち必ず之を讀め。他人のノートブックを借りて其足らないところを補ふやうにせよ。疑はしい所があつたならば字引を引くなり、他の書物を參考するなりして之を質せ。若し更に疑はしい所があつたならば、明日行いて先生に之を質せ。一も疑しい所があつたら其場で質して了はなければならぬ。一つ〳〵が積んで澤山になるといふと仕舞には何れから訂正してよいか分からないことになる。事は唯々勉強にあるのみであるから、一々初めより鄭寧に質して置かなければならぬ。

チ　試驗　學校の生徒は唯々試驗に及第することのみを求めて居るやうではならない。又試驗に好い点を取るといふことのみを求めてはならない。好い点を取りたがるのが惡いとは言はぬけれども、それ

だけの爲めに勉強するやうでは面白くない。多くの先生は自分の教へた通りに答案を作れば好い点を與へるに違ひない。けれどもそれだけが生徒たるものゝ能事ではない。先生の言ふたことが深く腦髄に分かつて居りさへすれば、假令先生の言ふところと違つた答案を出しても差支ない。先生の言ふことを能く呑み込んでそれに對して異論があるといふやうな場合には異論を立てたところで差支へないのである。さうすれば或は点が悪いかも知れないが、斯くの如き場合に於て点の悪いのは心配するに足らないのである。學生は須らく自己の力を養成することを努めよ。自己の腦髄にあるものの多いことを努めよ。試驗の爲めに勉強するとか、好い点を取るといふだけであつては甚だ面白くない。

佛蘭西のヅモーランといふ人が『英索優勝論』といふ書物を著して、其中に、英國人と佛國人との性質の差を述べたことがある。英國人は試驗に及第しやうがしまいが關はない。自分の學力さへ附けば宜いといふ風である。佛國人はそれと違つて試驗に及第するのを唯一の目的として居つて試驗さへ了はればあとは野となれ山となれといふ風である。それであるから英國人は鷹揚で人物らしくなるけれ共、佛國人は其場遁れのことばかりして居るから大なる人物が出ない。是れが佛國人の大弱点であると。こういふことを論じて居る。是れは誠に面白い論である。我が日本の學生の中にも大に佛蘭西風があるやうに思はれる。

試驗廢止といふ論もあるけれども必ずしも宜いとは思へない。自

分一個の意見としては試驗はやるが宜い。唯だ生徒として如何なる心得を以て試驗に對すべきかといふと、試驗に勝たんことを努むべきである。試驗の爲に破られても宜いといふやうな了見であつてはならない。即ち如何なる困難と雖も、苟も困難である以上之に打勝つことを努めよ。試驗に於て完全なる答案を作らう即ち完全に一年間に學んだことを理解してやらうといふやうな工合に努力すれば、此努力たるや大に稱すべき者がある。而して此努力を出す機會がないと困るからして、試驗といふものを設けて之を機會として努力させることになる。斯うなれば試驗といふ者も大なる意義を有つて來る。自分は試驗を廢さない方が宜いと思ふ。而して學生たる者は須らく此の如き意味に於て試驗に臨まなければならぬ。點を取るとか及第するとかいふと許りを目的としてやるやうでは甚だ卑怯である。試驗勉强といふて唯其場を遁れる爲めの動機を以てやるのは男子として誠に不面目の次第である。

學校の價値　學生諸子は須らく大に考ふべきである。若しノートブックを讀むのみを以て學生の能事了れりとするならば、一年間乃至三年間教場に出る必要はない。一冊の書物を購ひ來つて之を讀みさへすれば宜いではないか。何故學校に出る必要があるのか。能く之を考へて見ることを要する。吾人の觀る所を以てすれば、學校はノートブックを製造する場處ではない。唯々教師が話をするのに都合が惡いものであるから自然書かせることになつて居るのである。けれども、書く書かぬは生徒の自由である。又先生が必ず書けと云ふこと

もある。是れは先生が生徒を見計らつて言ふことであるからして先生の命の儘にするがよいけれども、書くことばかり卽ちノートブックを作ることばかりを以て學生の能事とする譯のものではない。

一年間敎場へ出てノートブックを作つたのと、ノートブックを人に借りて一週間で讀上げて了つたのと何れが効力がある。勿論前に言ふた通りノートブックを作るだけであればつまらぬ事になるけれども、敎場の價値學校の價値は、實に先生の口より聽くと云ふところにある。先生に接するといふことにある。書物の上丈で見るといふと如何にも正々堂々と理窟を稱へて居るやうであるが、其の人に會つて見ると案外つまらぬと思ふこともある。書物の上には感情はない。けれども實際先生に會つて聞けば熱情のあるないが區別される。大に確信して言ふところもあるし、又それ程の確信なくして言ふところもある。其等の口調が詰り以心傳心的に生徒に傳はつて行くのである。それに據りて生徒は此事柄は今、日本の學界に於て乃至世界の學界に於て何の位まで一切の人に依り信用されて居るかといふことが分つて來る。此故に敎場に出て來ると云ふことが非常に利益がある。書物といふものは、早く言へば死んだものであるからして、冷々淡々である。先生の講釋は感情のある人間の口より出るものであるから抑揚頓挫がある。この点に於て非常に深く腦髓に印象するのである。

之を聽き慣れて居るといふと次第々々に先生の腦髓が自分の腦髓に傳はつて行くからして自分の腦髓が出來上るやうになるのである。此点が敎場の利益である。書物で讀んだのであると唯々眼を以て見

ただけであるから深く感ずるといふこともない。物に譬へて見ると、飯を炊くにしても、瓦斯の火を以てするのと、薪を以てするのと、藁火を以てするのと非常なる相違を來たす。瓦斯で作つた飯は旨くない。薪で作つたのはそれよりは旨い。一番旨いのは藁火で作つたので、軟かく、ふつくりとして、水加減も好い工合に出來る。何故であるかと云ふに、藁で炊けば時間が掛ゝる。時間が掛かる代りに米の細胞の中に順々に水が泌み込んで順々に澱粉質が變化して行く。總てがなだらかに行はれる。瓦斯や薪で炊いたのは左う云ふ工合に行かないのである。學校に於て先生の講釋を聽くのは恰も藁火を以て飯を炊くやうなものである。次第々々に泌み込んで次第々々に腦髓が改良されて行くのである。であるから一年の後二年の後三年の後には大に變動したる腦髓となつて了ふ。書物で讀んだゞけであると云ふと、早く讀める代りには腦髓が變つて居らぬ。

であるから教場と云ふものは腦髓を好くする場所である。腦髓を持つて行きさへすれば如何なる理窟でも解かるやうになるのである。材料を詰込む所とは違ふ。腦髓を好くする所である。譬へば刀を磨くの場所である。能く磨きさへすれば大に利用することが出來るのである。惡く磨いたならば大なる作用をなすことは出來ない。

自分も嘗て大學に居る時分に斯う思つたことがある。先生の講義を聽くよりも一二週間で一冊の書物を讀むだ方が宜いと。さうして學校を缺席して居つたこともある。けれども今から考へると云ふと大に間違つたのである。

又　現代潮流の理解　現代潮流といふても俗に所謂現代思潮と云ふ譯ではない。唯々今日の一般の思想界を云ふのである。此思想界を知らんとするは現代の人に接するより外ない。書物を讀んでも勿論知ることは出來るけれども、人に接すると種々なる点に於て之を知ることが出來る。「先生の口調も分かり、先生の態度も分かる。此意味に於て教場は大なる價値を有するのである。ノートブックを作らないで、前に述べたやうな方法で其下讀をして後教場に出て、先生の言ふことを輕く理解することの出來るやうになりさへすれば尚更大なる效力が出來る。尚更腦髓が改良されるのである。此点は特に學生の注意を要する。

ル　學問の心を長ずる事　學校は一年二年三年四年五年六年と云ふやうに程度がある。例へば中學にしても、專門學校にしても學校と云ふ以上は學問の心を伸ばすことを努めるのである。英語にしても是れ迄はリーダーの第一であつたのが、第二になり第三になると云ふ樣にする。數學にしても是れまでは一次方程式しか分からなかつたのが、二次方程式三次方程式が分かるやうにしてやるのである。學問の心を伸ばすのが學校の目的である。であるから、學校に居る者は須らく學校の學科を十分に勉强し理解することを努めなければならない。然らざれば學校に這入ただけの効力はないのである。所が他の一面に於て書物を多く讀むと云ふことが必要である。澤山の書物を讀まなかつたならば矢張學者にはなれない。今日大學の漢文科を卒業しても昔しの樣な漢學先生にはなれない。何となれば學校で讀む所の書

物は其の分量に於ても先づ知れたものである。昔しの漢學の先生など子供の時から非常に澤山な書物を讀んで居る。けれども昔の漢學の先生を取りて今の大學卒業生に較べると腦髓に於て非常な違ひがある。昔の漢學の先生は腦髓が惡い、物の道理が分からない。今の大學卒業生は腦髓が好い、何を問いても能く解かる。

學校の生徒は多讀を要するけれども學校の下讀や其他のことに忙しいからして、なか〳〵一冊の書物でも讀むと云ふことが出來ない。出來ないと云ふことを憂ふる必要はない。それよりも學問の心を伸ばすといふことを努めるが宜い。而して若暇があつたならば一冊でも餘計に書物を讀むことを心掛けて居れば宜いのである。

七　試驗準備法

イ　試驗は大難關　今日數十萬の生徒青年は皆何れも試驗に遭遇し之を以て難關と心得て居る。試驗にも學校內部の試驗と、新たに他の學校に入學せんする試驗とある。兩者大に意味を異にする。殊に敎員檢定試驗とか高等文官試驗などゝ云ふものは、是れ亦非常に意味が違つて居る。隨て試驗準備としても一般に述べられる所もあるし又特別に述べなければならない所もある。

けれども一般に試驗に對する所の心得は、前に述べたやうに其學問を根柢的に理解すると云ふ意味に於て努力すべきである。試驗に及第すると云ふ心得のみを以てやつて居ると、萬一試驗の爲めに落第さ

せられた時には大に落膽することになる。余が試驗を以て必要な物とするのは卽ち學生青年の努力を試驗すると云ふ点に於てである。

ロ 早くより着手せよ　試驗の間際になつて一概に勉强しやうとしても出來ないことがある。早くより着手して置くに限る。早く着手して一科一科或は一冊一冊に就て能く其意味を味ひ、之を理解するやうにして置け。斯くする時は悉く能く腦髓に收まつて居る。一旦腦髓に收まつたことは忘れるにしたところで又直ちに想ひ出すのである。

若し十分に之を勉强して其書物の根本精神乃至謂はば定義までが能く分るやうになると、殆んど輕く之を理解することが出來る。高きより卑きに臨むが如くに之を理解することが出來る。斯うなると云

ふと、忘れると云ふことは極めて少い。自分の心持が其書物と合體してしまつたやうな氣になる。斯うなれば決して忘れない。早くより着手して一冊一冊に又は一科一科に斯樣な工合になることを努むべきである。

ハ 徹底せよ　總ての事柄はアヤフヤではいけない。必ず徹底せなければならぬ。自分の精神に於ても、徹底したと云ふ一種の感情がなければならない。

平生より勉强して居るにしても、試驗前になれば何人も更に大に勉强する。是は人情の自然である。如何なる勉强家と雖も免れない所であるから、之れを惡いとするのではない。若し此場合に勉强しやうと思つたならば我が腦髓が破裂せんかと思ふ位までにやれ。決して

輕々しくやつてはならない。夜は何時までゝも關はず勉強せよ。唯々明日に差支ないことだけは考へて置く必要がある。此點まで精神を集注して大々的に奮發すれば、必ず徹底したといふ感情が起つて來る。さうすれば試驗に應ずるに當ても餘程爲し易いのである。

二　各學科を一緒にするか　種々なる學科を同時に勉強するといふとなかなか腦髓には收まらない。忘れるといふ心配のあるものは之を後に讓るとして試驗前になつて勉強せよ。主として理解力に訴へる學科例へば數學とか論理とか物理とか化學とか云ふやうなものは早くより之を徹底して置くが宜い。歷史とか地理とか云ふうものは比較的後に勉強した方が宜い。尤も歷史や地理が大に六ケしいと云ふのであれば、前から一通り勉強して置くも宜いけれども、先づ大體の方針は主として斯くの如くすべきである。如何となれば理解力に訴へる所の者は忘れない。忘れたにしても想ひ出し易い。一つの緒を得れば他は悉く連なつて來る。歷史上の事柄や地理上の事柄になると、一つ想ひ出しても他を想ひ出すと云ふ譯に行かない。純然たる暗誦である。深く腦髓に收める事が出來ない。暫くすると忘れ易い。であるから試驗に近くなつて勉強する方が宜いのである。

何れにしても一學科を徹底した後に更に他の一學科を徹底せよ。又其學科を徹底した後次の學科を徹底せよ。次第々々に進むべきである。未だ一學科を徹底しない內に第二の學科を始めると云ふと前後混同して了ふ。腦髓がそれだけ惡くなる。恰も粗讀と同じ事である。二個の外國語を同時に始めたのと同じ事である。讀書法の部で

述べた通りであるから之を參考せよ。

ホ　試驗と睡眠時間　試驗間際になつて徹夜する者があるが、是れは大に考ふべきことである。試驗が假りに六日續くものとすれば、其第一日や第二日に徹夜すると云ふと、其次の日は睡くつて堪らないからして、其日の試驗に於て失敗する。最後の日即ち第五日目に徹夜するのはよい。六日目は既に試驗の濟む日であるから假令晝寢をしても早く寢ても差支ない。

試驗と雖も割合に腦髓を休めなければ出來ない事であるから、毎日々々一定の時間安眠することを要する。餘り試驗にのみ熱中して了つては是れ亦失敗の源である。徹底と安眠と兩者の權衡を計るのが恐らく試驗に應ずるところの秘訣であらうと思はれる。

ヘ　試驗と健康　平生と雖も健康には注意せんければならないけれども、何日何時に試驗を受けると云ふことであつたならば殊に健康に注意せなければならぬ。或る点までは健康は注意に依りて保てるものである。胃囊を害すると睡くなる。睡くなれば書物が讀めない。又睡眠時間を餘計に取らなければならぬ。さりとて餘り餘計寢る習慣を付けると是れ亦宜しくない。健康は試驗前に當りては殊に注意を要するのである。

けれども試驗を受けんとする者は、須く其方面にのみ精神を集注すべきである。餘り衣服や食物などの末に拘泥してはならない。萬が一にも其等の事に氣が留まるやうであると學問の方に熱心なることが出來ない。熱心なることが出來ないと云ふと、やはり失敗の源にな

る。であるから、其等の方面に就て神經質にならないやうに努めることが必要である。

ト　試驗の答案　試驗の答案の書方などに就て注意をする必要はない。何となれば、是れは單に其試驗に善い点を取ると云ふだけの事であつて、學問修養上には大なる意味がないからである。吾輩が之を述べる必要はないけれども、先づ試驗をする方面からして又試驗官と云ふ者が矢張り感情ある人間であるから、受驗上に於て注意すべき点を二三述べることは青年諸子に取つて強ち無益の業でもあるまいと思はれる。

第一　試驗の答案は最も明瞭に書かなければならない。明瞭と云ふことにも二種類ある。字體を明瞭にするものと意味を明瞭にするものと是れである。草書や行書などで書いては宜しくない。勿論楷書である。平假名でも宜しくない。片假名である。又文章は言文一致では宜くない。必ず普通文で簡潔なるべきである。

第二　文章に巧みなることを要する。試驗は文章を見るのではないとは云ひながら、やはり文章が簡潔であるとか、又は文章が流暢であるとか云ふ方が宜いには違ひない。是れは平生何事に就ても心掛くべきである。

第三　發表の方法が巧みでなければならない。例へば表で解ることであれば、表を以て之を示すと一目瞭然たることが出來る。其表を書くにしても、括弧を用ひるとか、點線を用ひるとか云ふやうにして、成るべく一目瞭然たらしむべきだ。腦髓の中に明晰に分かつて居

るものであれば其儘に明晰に發表することに努めなければならない。

第四　さりとて又人に分からせるやうな方法でなければならない。如何に自分には明晰であるからと云ふても、人に話をするには、話す順序があるから、第一番には此話をする第二番には此話をすると云ふやうな工合に話の順序を考へることが必要である。

第五　文字に誤りなきことを要する。文字に誤りがあると、大に試驗官の感情を害するものである。吾輩は斯くの如きことには頓着しないけれども、多くの人の言ふ所に依ると、文字を間違へるやうでは外のことも知らないに違ひない、假令知つて居るにしても少くとも此方面では大缺点があるから好い点は付けられないと云ふやうなことを言ふ人がある。故に文字を間違へないことが必要である。實際之には一應理窟がある。何となれば文字を間違へるやうでは文字の常識がないことが分る。故に學問に秀でた所で此のことに於ては缺点があるから全体としては宜しくない。全体として宜くない者には好い点を付ける必要はないのである。

第六　間違つたことを書かない事を要する。總て間違つた事を言ふのは面白くない。自分の腦髓に於て明瞭なることを言ひ、自分の腦髓に於て精確なりと思ふことを言ふべきである。間違つたことを答案に書くと云ふと、其人物はやはり間違つたことを知らないと云ふことを意味する。即ち換言すれば誤りを自覺して居らないのである。若し誤りを知りながら書いたとするならば其人物には不明

瞭な所がある。不精確な所がある。誤りと知りながら他人に向つて言ふのは道德上疑はしいことにある。是れが亦試驗官の感情を害することになるからして、青年諸子は須らく注意すべきである。

第七。餘り長かるべからず餘り短かゝるべからざる事を要する。答案が長過ぎると試驗官は之を見ることが出來ない。又餘り短いと云ふと答案に不熱心なる者と思はれる。長からず短かゝらずと云ふ所が宜いのである。短く書いても要点を摘んで居るものもあるけれどもそれまで試驗官が見拔くことは少い。

第八。文字は餘り大きからず餘り小さからざるがよい。餘り小さく書いてあるのは氣障なるものとして感情を害する。餘り大きく書いてあるのは甚だ大ざつぱな奴であるとして厭がられる。試驗官に見せるのは甚だ六ケしいものであると云ふことを自覺せんければならない。

第九。試驗場に出たらば最も紙鉛筆等の整理を必要とする。答案を書く紙が乱雜になつて居るといふと腦髓が亂れる。殊に數學の如きは左樣である。運算をした紙は錐で机の右の隅に刺して置き清書の分は左に置く樣にせよ。其他此類推して知るべきである。

昔韓非子と云ふ支那の法律家があつたが、此人が說難と云ふ文章を著して君主を說得するのは極めて六ケしい、如何なる君主には如何なる方法にて說くべきかと云ふことを說いたが先づ試驗の答案を書くにもやはりいろ〳〵な注意が必要である。

八　小學教師の勉强法

イ　小學教師の位置　小學教師は總ての職業の中に於て比較的學問文字に接近して居る者であるから、勉强法に就いても大に考へなければならない。小學教師が勉强法を誤らないといふと大なる學者となる事も出來るし、又大なる教育家ともなることが出來るのである。唯々小學教師は割合に音聲を勞するが爲めに疲勞を感ずること甚だしいものである。凡ての職業の中に於て音聲を勞する位疲れるものは恐らくないであらうと思はれる。音聲は人間の呼吸器を勞するものである。殊に喉の聲帶を勞する者である。而して身体全体にも亦疲れを感じて來る。是れが爲め小學教師の多くは皆痩せて了ふ。頰の肉がこけて來る人がある。音聲を勞すると腦髓に響く。此点からいふと音聲を勞するところの學校教師位困難なるものはないであらう。單に身體を動かすだけであれば殆んど疲れない、却つて運動になつて宜いのである。又事務を執る者であつたならば腦髓は使ふに違ひない。學校の教師と同じである。けれども音聲を使はないだけに疲勞を感じないのである。凡そ一切の職業の中にて最も大なる精力を要し、身體を疲れしむるものは恐く學校の教師であろう。

此故に學校の教師は比較的に靜養の時間を要する。實際休養の時間も多い。一日は五時間位で後は自分の時間になるのである。所が實業家や官吏などに至つては朝から晩まで出て居らなければならない。其上に夏休冬休等も少い。社會は學校の教師に對しては斯くの

如き特点を與へて居るのである。されば疲勞を感ずるにしても又大に回復して以て大々的奮發努力の餘地を殘すことが出來る譯である。今小學校の敎師に就いて其勉强の方法如何を見れば凡そ左の如きものがある。

□　學校の學科を中心とせよ　小學敎師は特別なる專門學を有つて居る者は別であるけれども、さうでない者が學問に志さんとしたならば、須く學校の科目を以て中心とすべきである。卽ち生徒に敎授する上に於て種々なる學科がある。其等の學科を中心として、以て次第に勉强の功を積むやうに努むべきである。例へば讀本に就いて言ふたならば。讀本の中にあるところの文字熟語等は學者先生と雖もなかなか知らるべからざるものがある。此等を充分に翫味し研究するやうにするならば、則ち次第に其方面の學問が發達する勘定である。趣味と實益との調和は茲に於てか之を求むることが出來る。

例へば人間萬事塞翁の馬と云ふことがある。此諺が何處から出て居るかと云ふことを研究したならば、先づ故事熟語辞典の如きに據るべきである。其辞典について何の書物にあると云ふことを知つたならば其書物を讀むのである。之を機會として其書を研究するやうにするのである。其一つの事柄を見んと努力する時には不知不識他の事柄にまでも興味を持て來て其の書物は如何なる事が書いてあるか、如何なる種類のものであるかを知ることが出來るやうになつて來る。それだけでも、つまり自分の學問の力となるのである。前に言ふたやうに、精讀が必要であるからして、其塞翁の馬と云ふ諺のある所だけを

須らく精讀して、其一文章に就いては疑ひないやうにするがよい。他日此外の部分を研究せんする氣にもなつて來る。或は亦物理學に於て磁石は鐵を引付けると云ふ事があると假定して見よ。何故に磁石は鐵を引き付けるのであるか單に磁石の性質であると云へばそれまでゞあるけれども、少しく之を研究せんとしたならば、中學校程度の教科書を讀んで、其部分の所を能く研究するやうにするが宜い。

斯く書物を眞中頃から讀み始めるといふことは、書物に依つては勿論出來難いけれども、唯〻參考と云ふだけであつたならば出來難いことはないのである。是れは讀書法の所で述べたことゝは少し意味が變つて居るけれども、參考と云ふことは勢ひ此方法でなければならないのである。又或は體操のことに就いて疑が起つたならば、生理學の書物を讀むべく、又或は他の書物を讀むがよいのである。是れとても充分に研究すると云ふと次第に學力が附いて來る。

斯く云ふと何だか雜駁に書物を讀むやうになつて、迚も完全な知識は得られないやうに思はれる。けれども其實さうでない。若し一冊の書物を精讀せんとすれば別である。是れは又新にやるべきである。

斯くの如く勉强するのは非常に骨が折れるに違ひない。けれども骨を折れば折るだけ其結果が出來てくるから、一面には樂みがある。卽ち國語の方面に於ても數多の書物の種類を知ることになる。隨て他日勉强の案內ともなる譯である。或は倫理學にしても動物學、植物學乃至物理學、化學のことに就ても自然と知識を具へて來る譯であるからして謂はゞ學問的常識がそれだけ遙かに具はつて來るのである。

八　專門學の研究　小學校の敎師は兒童に敎ふるだけでも先づ普通學はやつて居る譯である。卽ち中學や師範を卒業した者であるからして、以上述べたるが如き方法を以て學問的常識を具へたる以上須らく學問を專攻すべきである。之に就ては特別に述ぶべきことはないやはり以前述べたる讀書法に依つて修むるより外ないのであるからして、茲に之を言はば、唯々最も注意すべきは學問的常識である。學問的常識がなかつた日には學者となることは出來ない。昔の漢學先生は漢學の書物だけは能く知つて居るけれども他の事を知らない。故に漢學の知識を運用することが出來ない。例へば支那の哲學を論するにしても、哲學の知識がない爲に其論ずる所が面白くない。人にも分からない。學問的常識がありさへすれば、之れに對して一種の光明を放つことが出來る。此点から言ふと小學校の敎師は誠に都合の好い位置に居るのである。大に此方面の發達を期せなければならないのである。

二　小學敎師の權威　小學敎師は自ら卑しと思ふ可からず。自分の敎へたる子供が、五年十年の後には中學を卒へ、專門學校を卒へ、大學を卒へて、學士となり、官吏となり、實業家となる。斯うなると自分は既に負けたやうに思ふて居る。又其生徒達も、大くなつたからといふて、今では先生と同等或は先生以上の者だと云ふ樣に心得て居る者がある。實に間違つた事である。先生は常に先生である。自分の由つて來る所の淵源が先生に在るのであるからして、如何に發達しやうが出世しやうが、先生として之を立てなければならないのである。それをあな

たと言ふたり君と言ふたりする樣になるのは其人物の薄ッぺらであると云ふことを示すに足る。

一方小學教師も亦大に修養を積まなければならない。青二才が大學を卒業したからと云ふても、やはり小學教師よりも劣つたる處があると云ふことを認めなければならない。又劣つたる處がある樣に力めなければならない。それは如何するかと云へば、他無し。唯自己の經驗を積むのみである。大學の卒業生が如何に學問が出來るからといふても、小學校の生徒を教へさせて見るといふと間誤ついて旨くは行かない。是れと同く凡ての点に於て經驗が足りないから、宇宙に對し、社會に對し、人生に對して小學教師ほどの見識を有つといふことは出來ないのである。

さればば小學教師は常に大に教育の事に付て修養を積むべきである。學問を研究するは別の事である。少なくとも教育の方法、手心、子供の取扱方、人間に對する態度方針等に付ては大に纏まつたる思想を懷くやうに力むべきである。斯うなると云ふと、假令青二才が大學を卒業して學問が出來たからといふても矢張り依然として青二才に見える。偉くは見えない。であるから、十年教師をして居れば十年だけの經驗を積み、十五年すれば十五年だけの經驗を積み、二十年すれば二十年だけの經驗を積んで次第に教育的意見、教育的主義、教育的態度、乃至は教育家としての資格、人間としての資格に於て一段々々に向上發展する樣に力むべきである。學者ばかりが偉いのではない。斯の如き落着ある人間が人間として眞に偉いのである。小學教師といへば中學の先生より劣つ

て居る樣に思ふのは大なる間違ひである。大學の教師と雖も德もなければ見識もないのがある。唯〻學問だけ出來るのがある。是れでは人間としての値打はない。世の小學教師を見るに多くは自重すると云ふ事を知らない。一年々々の經驗を積んで以て大見識を啓くと云ふ事を知らない。是が抑〻小學教師の欠点であるから大に修養を努むべきである。是れには勿論前に述べた樣に學校の科目を中心として種々の學を勉强する必要がある。又專門の學を研究する必要がある。殊に教育學や道德學等の事に付ては十分に研究する必要があるのである。

九　夏の勉强法

イ　長い時日　學校生徒は平生は一週間と續く休暇を有たない。縱え之を有つたにしても豫習をせなければならず、又復習をせなければならない。其日々々に於ては素より明日の豫習をせなければならないから、殆ど自由の時間と云ふものはない。故に一冊の書物をも讀むことが出來ない。縱え出來るにしても、なか〳〵長い月日を要する。然るに夏期休暇又は冬期休業になるといふと長い時間が得られるので、初めてゆつくりと一冊の書物を讀むことが出來るのである。であるから平生は學校の事を勉强して學問の心を造るやうに力めるがよいし、休暇になつたら之を利用して己れの好む書物を讀むやうに力め

るがよい。一言に約すれば休暇中は多讀の時期である。

ロ　夏期の簡易生活　夏期は簡易生活に適する時節である。衣服の末に拘泥する必要はない。十分に勉強に心を注ぐことが出來る。蚊の出る時に當り蚊と闘いつゝ勉強するも亦一興である。晝間十分に勉強すれば、夜は疲れるから、蚊と闘いつゝやつても却て効果がある。冬期に當り火鉢を擁し蒲團を擁して書物を讀む樣では迚も充分には讀めない。其等の事に暇を費やす丈でも讀書の時間が殺がれることになる。夏期は簡易生活の出來る時であるから最も讀書に適するのである。殊に面白いのは、夏期は早起することも出來るし、隨て又夜早く寢ると云ふことも出來る。晝間充分に勉強すれば夜は手紙を書くなり簡單な事をするなり、何れにしても餘り精力を費やさない方に時間を利用するがよい。

ハ　夏期の衛生　夏期の衛生とて特別に注意する程のこともないが人に依つて、或は日中は書物を讀めないと云ふ人もある。朝早い方がよいと云ふ人もある。此等は其人々の事であるから如何ともすることは出來ないけれども、吾輩の經驗する所に於ては、暑いからといふて書物の讀めぬと云ふことはない。朝早くは氣持が好いに違ひないけれども、朝早くだけでは不十分である。

夏期休暇中には旅行する人もあるし、又は海岸に避暑するといふ人もある。けれども此等は特別なる人のすることで一般青年學生の爲すべきことではない。青年學生は勿論避暑避寒の必要はない。病人であれば己むを得ぬが普通の人であれば全然其必要は無い。元來平生

學校の事を勉強して疲れると思ふのは間違である。學校の課程は凡て中等の人を標準として立てたものであるから學校の勉強をして其れが爲めに身體が疲勞するといふことは恐らく無いであらう、有るにした處で是れは少數者の事である。世間の人は夏期休暇中には充分に身體を養へと云ふ。生徒に依りては斯くせんければならない者もあるであらうけれども、普通一般の法則とすることは出來ない。

自分は夏期休業を遊戯に費やすことを好まない。學生としては夏期休學は書物を讀むとの出來る非常に好い時期である。夏期休業のある人は之を利用すれば一大事業を成すに足る。

けれども、身體の弱い者は各々自ら衛生法を考へるより外ない。一般に衛生の法則を立てることは出來ない。海岸に行いて海水浴でも

しながら書物を讀め勉強せよと勸める人があるけれども、自分には此意味は解らない。海水浴などは贅澤なことで、普通一般の學生の爲すべきことではない。のみならず、海水浴といふことの面白味を感じて、年々行きたくなる。費用も掛かるし、其れだけ讀書の時間も殺がれることになる。簡易生活の習慣を養はんとする者は斯の如き贅澤なることを考へてはいけない。夏期休業中に海邊で裸體生活をすることの出來るのが簡易生活であるかと云ふと、然うでない。汽車に乘り宿屋に居るといふ事は既に複雜なる生活である。自分の家に居つて着物も着ずに勉強すれば是れが最も簡易生活と謂ふ可きである。汽車や旅館はどれだけ人手を掛けるものであるか、言はずして明かである。汽車は文明の最大利器である。之を利用するのは大に人手を掛ける

ことである。贅澤なことである。

唯々夏期休暇中に於て青年學生の最も注意すべきは飲食物である。成る可く水を飲まぬ樣に又規律を立てる樣にして行くことを要する。食物も成る可く控え目にする樣にしさへすれば身體の健康が維持されるであらう。冬期着物を着て居るといふと身體か自由でなく、皮膚が空氣に觸れないから自然と生活力を消耗する。けれども、夏期裸體になつて居れば此憂がない。書物を讀みながら、直に庭前の樹木に登つたり、直に跳足で水を撒いたりすれば身體の健康は最も能く維持される。肉體の健全な者であれば、暑い時に水を撒くとか又は其他の勞働に從事すると益々氣持ちが良くなる。

素より如何なる勉强家と雖も、朝から晩まで机に對つた切りでは肉體の健康を害する。心は斷へず讀書に在るべきであるけれども、極めて簡易なる運動法を取る樣に又實益ある運動法を取る樣に力むることが肝要である。吾輩は海水浴だとか旅行だとか云ふ樣な贅澤なことは知らない。けれども、如何にすれば身體の健康が維持されるか勉强が出來るかと云ふことだけは能く之を知つて居る。

二　一科を勉强せよ

勉强心の强い者は夏期休業中には大に勉强しやうと思ふて居る。冬期休業中もやはり同じことである。或は獨逸語、佛蘭西語をやらうとか、或は此書物とあの書物を讀んで了はうと云ふ樣に澤山のものを勉强しやうと思ふ。謂はゞ慾張る傾がある。是れが初學者に取りて大なる誤である。讀書法の所に於て述べた樣に書物は精讀を要するからして、成る可く少しの事をやる樣に力めよ。

少しの事をやると云ふのは眞に少しの事をやるのではなくして終には大なることをやのるである。休業中には例へば一科の學問を暗誦する樣に力めてもよい。漢文で云へば大學又は中庸を諳誦することを力めてもよい。或は書經の堯典舜典でもよい。詩經の周南召南でもよい。何でもよいから時間を浪費しない樣に勉強しさへすればよいのである。其等のものを充分に暗記することを力めて見よ。さうすると云ふと、新たに學期の始まつた時に漢文だけは非常に樂に感ずるに違ひない。其知識が向後自分の腦髓の中心となるに違ひない。自分は青年學生に對して常に此事を勸めて居る。果してどの位の實行者があるか知らないけれ共、欺されたと思つて斯くせよ。効力のあると疑ひないのである。或は又幾何學一科だけを勉強せよ。英語でもよい。英語をやるにしても一冊の書物でなくてはならない。此書物もあの書物もと云ふ樣では迚も出來ない。一つの英語の書を勉強せよ。其一の書も全体でなくても宜しい。一局部でも宜しいから、時間を浪費せざる樣にして充分に勉強すべきだ。斯くすれば其知識が終身自分に附纏ふて己れの寶となることが出來るのである。是れが休業中に於ける勉強法の最も大切なる事である。然るを世の勉強家が種々樣々なることをやらうとして失敗に終はる。實は自分　度〻此事を經驗した。所謂虻蜂取らずと云ふ樣になつて了ふことが多い。實に精力の不經濟である。であるから日本の青年讀書子は是非共此點に注意されんことを希望するのである。

休暇中に充分勉強したる所が終身自分の助けとなると云ふことを

注意せよ。世の學者先生を見ても、多くは特別に或る時代に修學したことが其人の腦髓を支配して居る。

ホ　良い書物を擇べ　夏期休業は人間の最も疎かにする所である。暑いからといひ、又休業だからといふて疎かにする爲めに小說を讀むで銷夏するなど云ふけれ共、是れは抑々間違である。書物を讀むならば今後の助けになる樣な外國語の小說を讀むがよい。學校に居る者は學校の學科だけで學問が出來ると思ふと心得違ひである。學問は限りないものである。學校の學科は唯一部の事を敎へるに過ぎない。之を應用しなかつた日には迚も役には立たない。懇篤として多方面に發達したる學者となることは出來ないのである。疲れると云ふ心配があり身體を害すると云ふ虞れがあつたならば、小說などを讀まないでむづかしい書物の極く一部分を讀むがよい。さうすれば骨も折れないし且つは未來に取つて非常に効力のある仕事が出來るのである。漢文で云へば古典を讀む英語で云へば最も有名なる書物を讀む。斯う云ふやうな具合にすべきである。

十　隨處の讀書

イ　電車内の讀書　近頃は電車内で讀書することが大分流行する。勿論電車内と雖も興味のあるものであれば充分に讀むことが出來るであろう。唯々停留場などを間違へるだけのことである。電車の中で讀むには第一自分の興味と云ふことが必要である。人の大勢居る所であるから興味のないものであると讀めやう筈はないのである。幾何でも代數でも、此所が解らないが何うしたらよいかと思ふて一生懸命になつて居る事であれば電車内に於ても効力があるに違ひない。けれども先づ普通一般には電車内では極く簡單なることでなければ出來ない。電車内で讀むのも宜しいけれども、又一面から言ふと電車

何ものゝ如く
なるものを
見て精神を
休める為
国民として見え。利はそも男なる。

の内に於ては却て讀まないで種々樣々なるものを見て精神を休めるのもよいのである。是れは要するに興味の問題であるから一概に何とも言ひ樣はない。

ロ　汽車内の讀書　汽車は讀書に最も適して居るが、是れとても亦簡單なるものが宜いのである。豫め汽車に乘ると云ふことが分つて居れば、外の仕事を早くやつてしまつて、何か一つ汽車内の仕事として殘して置くがよい。或は自分の仕掛けて居る仕事が是非間に合はせなければならぬと云ふ樣な場合には、汽車の内まで持込でも案外効力のあることもある。是れはまた興味の問題であるから一概には言へないが、電車とちがつて汽車は時間が長いから大　之を利用することが出來る。是れとても或は睡眠に費やすとか、或は景色を眺めるに費や

すとしても效力はあるのであるが、唯々自分の精力と時間利用の如何を顧みるに在るのみである。

けれども先づ一般に汽車内では極く平易なる而も知らざる可からざるもの或は知つて居れば其れだけ重寶であると云ふやうなものを見るがよい。謂はゞ常識を養成して世間を知ると云ふ樣なことに勉めるが宜い。

八　讀書會　書物は一人で讀んで居つては案外捗が行かない。又力が續まらないことがある。多くの人を集めて一緒に讀むと云ふと、精神を爽かにし精力を集注せしむる効のあることが多い。讀書會でもあれば成る丈け出席して讀む樣にせよ。規則正しく繼續して居ると案外進歩は早い。一年位經過するのは難作ない。一科の學問でもやらうと思つて居つて、一年や二年やらないで了ふことが多い。讀書會でもあれば其れに依つて不知不識の間に知識を得て了ふ。

九　讀書第一　如何なる人と雖も必ず讀書を要する。讀書するにあらざれば見識は出ない。見識が出なければ社會に於て地位を占むることは出來ない。然るに今日の世に當つては如何なる書物を讀んでよいか分からない。封建時代であれば四書五經を讀めば一方の學者と云はれて議論も立つたのである。其實は四書五經だけでは唯々書物を讀んだと云ふことに止まつて如何にして天下國家を治めるかと云ふやうな事は分からないのであるが、兎に角封建時代に於ては四書五經を讀んで居れば普通の人と應對をすることが出來たのである。然るに今日に於ては百科の學問が並び興つて居るからして、如何なる